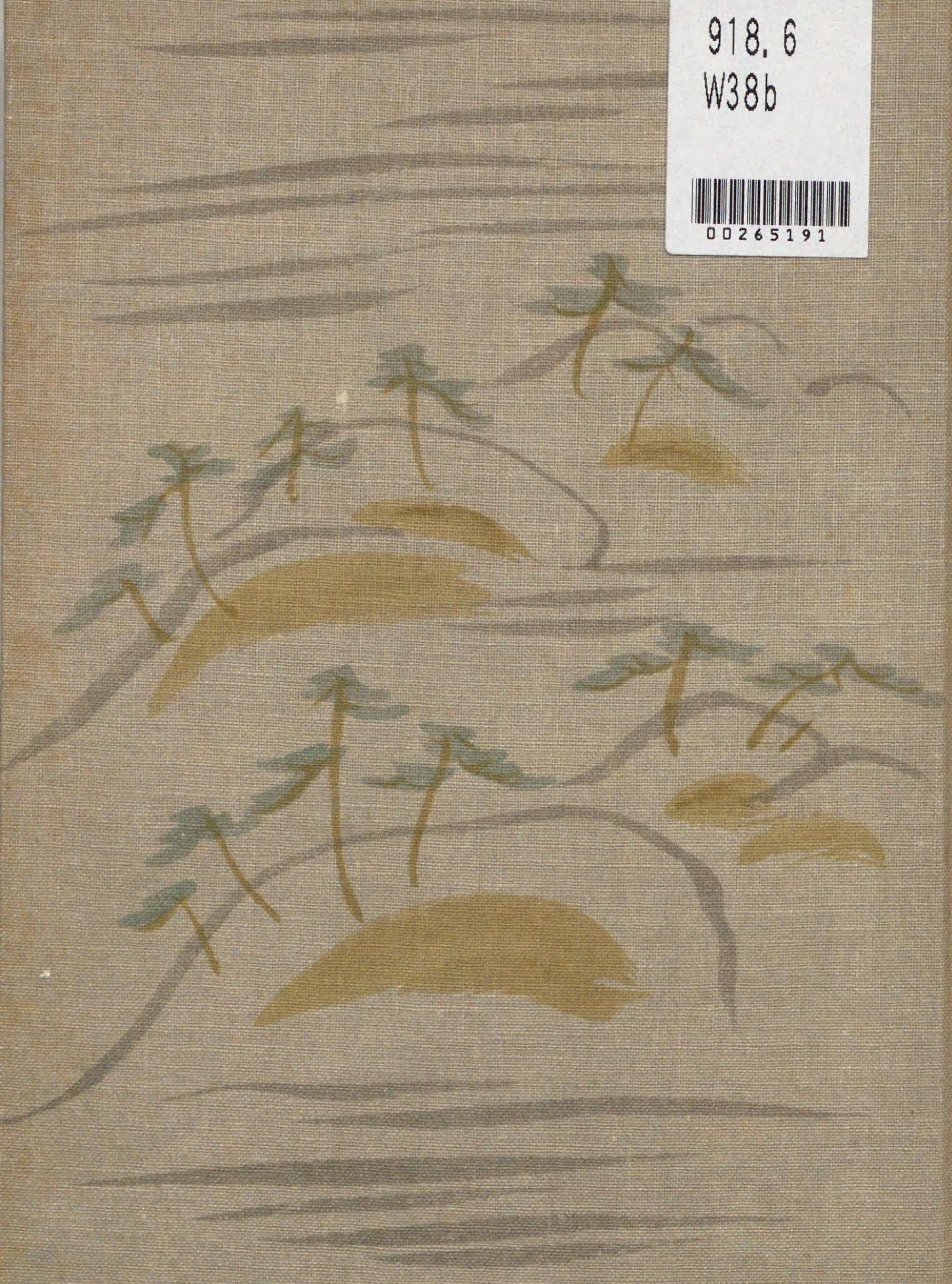
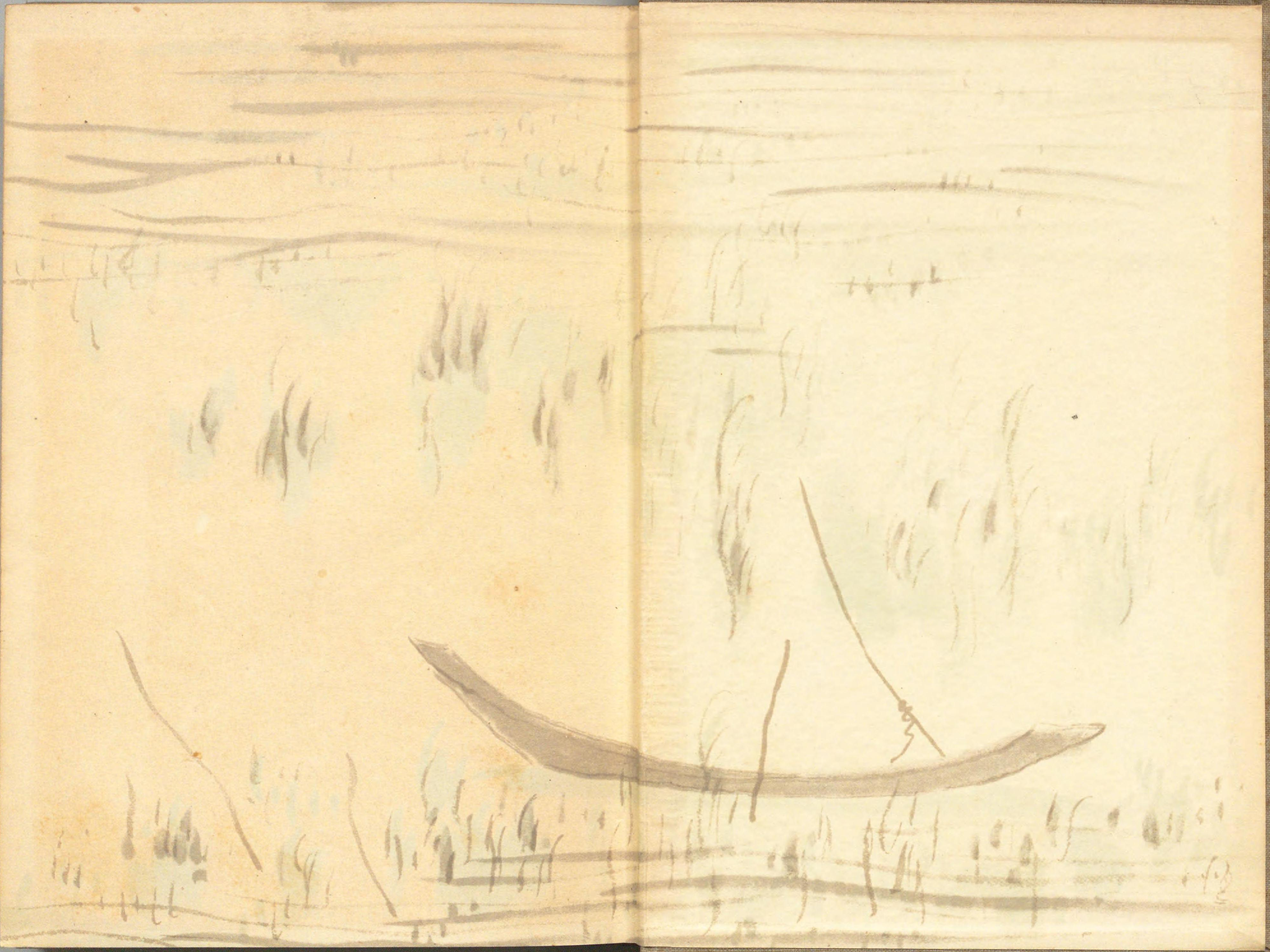
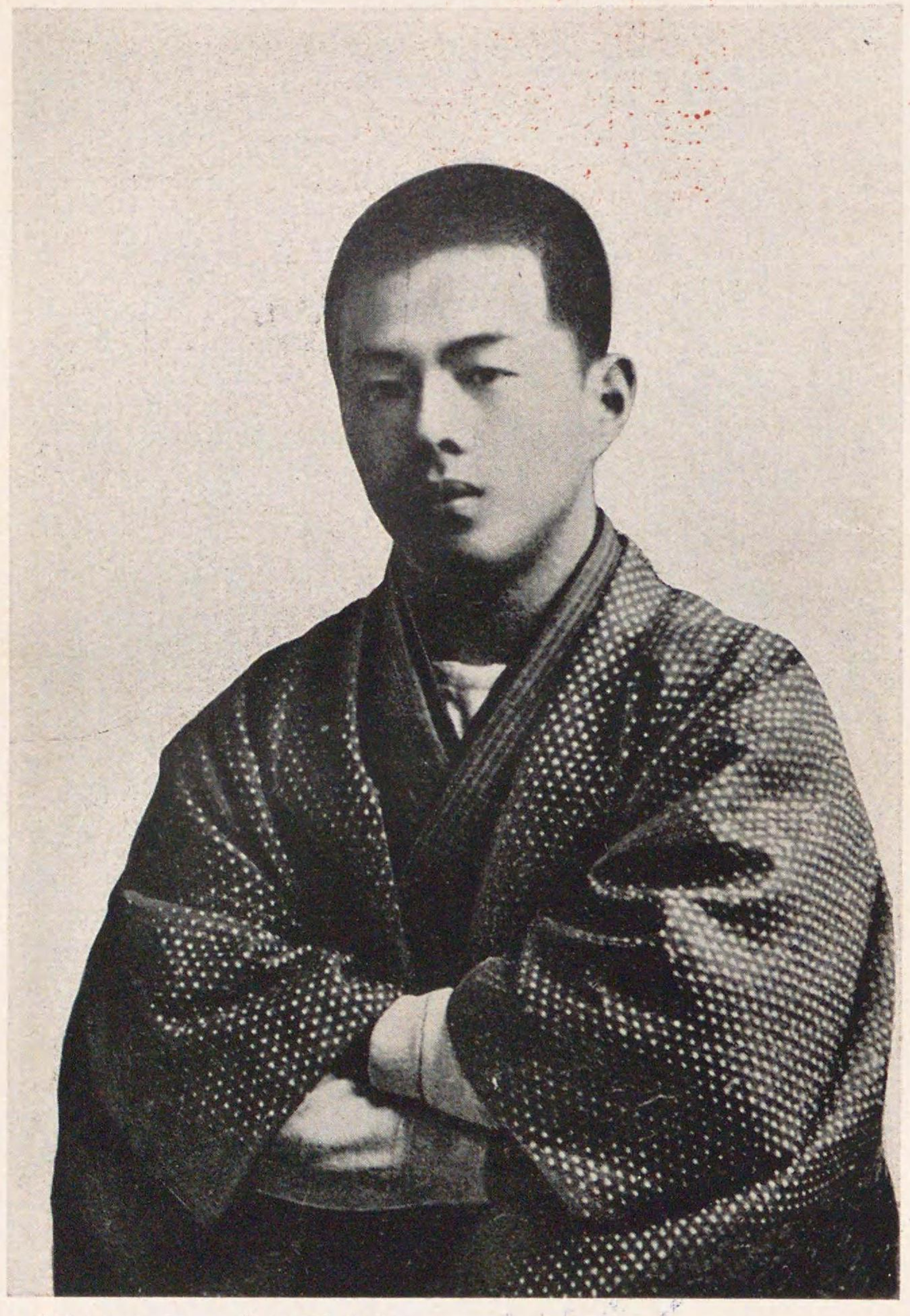
918.6
W38b
00265191





# 牧水全集

第九巻



（明治四十一年十二月）

國立國會圖書館藏書

国立国会
27.4.16
図書館

265191

（大正十五年三月）

日向の生家にて（昭和二年七月）

市道町の家

1

# 第九巻歌論・歌話・長詩・童謠目次

## 歌論・歌話


閑語……三
所謂スバル派の歌を評す……九
二月の歌……一四
『山河』を讀む……三一
最近歌壇の印象……三五
石川啄木君の歌……五七
我が見たる最近歌壇……八七
『土岐哀果集』の印象……一〇三

『和歌合評』より……一〇四
自歌自釋……一一六
いろいろの人と歌……一八六
所感……二〇一
合評を讀む……二〇三
歌話一題……二〇八
批評と添删……二〇九
質疑應答……二一八

## 長詩

日陰にてうたへる歌……三五三
死か藝術か……三六〇



有明の月も無し……三六七
我が椿の少女に與ふる歌……三七三
失題……三七六
雨三題……三七八
冷たさよわが身を包め……三八三
釣……三八六
空想と願望……三九一
夏の寂寥……四〇一
枯野の旅……四〇七
冬の朝……四一四
繪具……四一六
松の雫……四一八

## 童謠

秋のとんぼ……四二一
雪よ來い來い……四二二
さアさア學校へいそぎませう……四二三
ちひさな鶯……四二四
春の雨……四二六
たんぽぽ……四二七
雲雀……四二八
八兵衞と兎……四二九
春の日向……四三四
櫻眞盛り……四三五



櫻散る散る……四三七
ダリヤ……四三八
夏のけしき……四三九
はだか……四四〇
かくれんぼ……四四〇
蟻……四四二
富士の笠……四四三
親鳥子鳥……四四四
よちよち歩みの良雄さん……四四五
百姓とかがし……四四六
百舌鳥が一羽……四四七
雁が來た……四四八

冬の畑……四四九
雪よこんこ……四五〇
雛雀……四五二
ひとりあそび……四五三
梅の木……四五三
山で拾うた胡桃の實……四五四
ゐねむり……四五五
天の河……四五七
泣蟲毛蟲……四五八
道ばたの鴉……四五九
向うの磯に……四五九
夏野とほれば……四六一





魚のとぶ海……四六二
親鳶子鳶……四六三
まきこさんのお乳……四六四
田舍に來ぬか……四六六
お丶寒小寒……四六七
落栗……四六八
殘雪……四六九
梅の花のお土産……四七〇
たろさんの足袋……四七一
山の向う……四七二
寒鴉……四七三
雪よさら／＼……四七四

蛙……四七六
赤ちゃんの夢……四七七
蛙の親子……四七八
小舟……四七九
蚊帳つり……四八一
涙ぶくろ……四八二
富士の初雪……四八四
栗の皮むき……四八五
青い服……四八六
野燒山燒……四八七
春と鳥……四八八
お天氣……四八九



子守唄……四九〇
犬の尻尾……四九一
ひたきの鳥……四九二
おやつ時……四九三
ねむりの神様……四九四
水菓子屋の秋……四九六
おもだかの花と蛙……四九七
夢になりたや……四九九
お晝の汽車……五〇〇
蟇の口と手……五〇〇
栗のいが……五〇二
けらのねぼけ……五〇三

蜂にさされて……五〇四
浮坊主……五〇六
左樣なら海よ……五〇七
かうもり……五〇九
どの木にとまつた……五一〇
果物……五一一
晴れた朝……五一二
蟬とり……五一三
足のない鳥……五一四
郭公……五一五
めだかときやうだい……五一七
曲馬を見ながら……五一八



## 其他

汽車……五二〇
梅と椿……五二一
春の濱べ……五二二
柿の花柘榴の花……五二三
ちんちくりん……五二四
舟唄三題……五二七
宮崎高等農林學校校歌……五二九

# 歌論・歌話

二

# 閑語

○今月で明治四十年も暮れて仕舞ふ。顧るに今年は餘程短歌にとつての饑饉年であつた。僕はこれを先づ二つの原因に歸することが出來ると思ふ。一つは所謂新派なるものの一時期が昨年あたりまでに終了を告げたことと、一つは文壇上他に小說新體詩の新萠芽が萠え始めたがため一般の眼目が短歌のうへに向はなかつたこととのこの二つである。

○所謂舊派なるものに對して起つた新派和歌は數年の間に種々の變化を經て來たが、漸次に自己を整へて先づ昨年あたりでその一段落を告げたものと見てもよからう。かの晶子女史の精粹「舞姬」「夢の華」は實にそのピリオッドであつた。次いで後を繼ぐべきものも無く、甲出て乙沒、今年は先づうき油なし漂へるかの觀があつた。が、その間に注意すべき二種の短歌集が出版せられた。一は平野萬里氏の「若き日」にして一は尾上柴舟先生の「靜夜」である。「若き日」は概して擧上の第一期中の作物に屬すべきものかと思ふ。もつともそのうちでも最近の作になるだけ新しい努力の影の見えぬではないが、その好し惡しは兎に角として要するに以前の時期中のものであらう。然し「靜夜」は違

ふ、確かに從來の日本の短歌中に見ることの出來なかつた或る種の意味がこの一卷の裡には籠つて居る。それがこの中で首尾よく大成したとは言はないが、その「靜夜」以後の先生の詠みぶりに由つて、ます／＼明瞭に一調子をなしつゝあることが明かである。雜誌「明星」の短歌も本年は煩悶時期であつた。その同人中の作でも甲と乙との間には大した差違があつて、そして概して大なる不振の狀態であつた。金子薫園氏の詩集「わがおもひ」といふのも出たが、變つた／＼といふ評判の高かつたにも係らず、一向以前の氏の調子と異らなかつた。違つた所はたゞその表面だけで、それも春着と秋着との間の差違位ゐだらうと見受けられた。その他には歌集とても出なかつた樣で、數量ともに本年は饑饉年であつたと言ひ得やう。

○自然主義とか古典主義とか、主義といふ評論上の言葉の最も烈しく流行つたのは本年で、それがまた必ず小說並びに長詩のうへにのみ限られてゐた。歌のうの字でも言ふやうな評論家は無かつた。由來評論家に乏しかつた短歌壇はいよ／＼單に作家及び讀者の上に限られて、從つてその活氣を失し、ます／＼不振に赴いたのだらうと想はるゝ。比較的多くの作家及び讀者を有する短歌壇にこの一の評論家無き一事は甚だしく奇異なる現象と謂はざるを得ない。吾人は切に眞の評論家の出でて、時にふれ吾人に苦酒甘酒の饗を寄せられむことを希望する。試みに本年中短歌に就いてかれこれ言はれたことを擧げて見れば、「明星」に隱見した與謝野氏の同人語と二六新聞に出た何とやら氏の佐々木氏攻擊と、十月の「文庫」に出た無花果氏の近時の短歌壇等を數ふるにすぎない。それもほんの斷片的のもので、强ひて僕の眼にふれただけを拾ひ集めたものである。



○「文庫」の近時の短歌壇中に於て、無花果氏が「明星」の短歌に對しいさゝか敬を失したかの趣きありしに由つて、その翌月の「明星」で與謝野氏から手痛く叱られて居た。その餘沫が僕のうへにも飛んで、「若山氏の歌の未だ歌を成さぬもの多き理由」云々といふ言葉が見えてゐた。これはいかにも道理の話で、僕自身には多き所でなく、詠んだ全部が未だ一として完全な歌を成して居ないと深く意識して居るのである。昨夜詠んで見て可なりに見らるゝ位ゐに思つたものも今朝見れば滅茶である。斯くして僕は殆んど寸時も安じ得ることなく蹌踉として明日を明日をと樂しんで、而して常に昨日の日を繰越して行きつゝある。滑稽且つ悲慘、時には歌など、止して仕舞はうかと念ひ立つこともある。然し流石にまた身に着いた銹で、未練氣なく然うも出來ず、依然として明日を明日をを繰返して、眼ばかり光らせて居る。自分ながら哀れむべき一個の囚人と謂はざるを得ない。

○然し、斯く苦しんでは居ても未だ決して絕望したことは無い。滑稽でもいゝ、悲慘でもいゝ、兎に角僕には明日があると斯う深く信じて疑はない。「明星」などであゝ叩かるゝとさすがに先輩の言で一寸身にこたへぬではないが、さまでにも痛みはせぬ。「明星」は「明星」、僕は僕、小さいなりにも僕には僕の色合がある。「明星」などと同化するの念もなく必要もない。

○また事實に於てこれからの短歌は從來の如く單純の流れでは通られなくなるに相違ない。今までは赤なら赤の一色だけが濃く淡く一貫して流れて來たかの觀があるが、これからはなか／＼然うは行かぬ。白もあれば綠もあらう。斯くして所謂光彩陸離の黄金世界を現出するかも知れない。

○今年の終りかた、卽ち先月あたりから俄かに一つの新流行が起つて來た。卽ち月刊歌集の盛んに出版せられ出したことで現に僕の眼に觸れたもの丶みで三種ある。尙ほこの外にも某々氏の何とかやらが出たとか出るのだとか評判せられて居る。三種とは「無絃」「麗人」及び「哀樂」。

○「無絃」は舊「なのりそ」派の二三氏に由つて出されて居るので、何れもみな昔の詠みぶりが泰然として保持せられてある。中に井上冷石氏のものがや丶新しく見榮えがするやうだ。「麗人」は內藤晨露氏の手に成るもので、他日短歌中心の韻文雜誌「高鐘」といふのの出るまでの仕事であるといふ。

○「哀樂」は友前田夕暮の作である。開いて見て第一に驚かる丶のは、その詠みぶりの以前と異つた點で、僕は先づ友が從來用ゐ馴らして來た形式を破つたといふその勇氣に對して多大の尊敬と讃辭とを呈さざるを得ない。そして一首々々熟讀して行くと、案外に不整頓の調があつたり不熟の想が詠み込まれてあるのにも氣がつくが、要するに淸新の氣が充ち溢れて居る。この月刊歌集を出すに當つて友の先づ念つた事は、徹頭徹尾僞らざる情の告白といふに在つたと信ずる。そしてそれが或る程度まで充分に成功して居る。友自ら言へるが如く、華かにして寂しき人生を歌ふべく渾身の努力が捧げられ



てある。友よ、汝が努力は先づこの一卷に於てはその破壞的方面に遺憾なく成就しある事を記憶し、更に汝が唯一の念願たる汝が新領地を開拓すべく、一步を建設的方面に進めざるべからざるを僕は敢言する。そして一卷の出づる每に斷えず汝を視むことを欲する。僕は君のこの「哀樂」を見て、來るべき明治四十一年に於ける一大動脈の早や惻々として吾人の前方に滿ちつ丶あるを感ずる。友よ、未來よ、僕謹み勇んでこの二つを祝福すると同時に、われ自らまた一種の歡喜を包み得ない。（哀樂は隔月の發刊で、麴町區三番町六十八番地白日社發行定價郵稅共七錢）

○僕等が「新聲」の編輯局に關係して以來、漸次に或る一個の特質を成し行きつ丶あることは夙くに讀者諸君の知悉せられたること丶想ふ。僕等は手を分つて散文に長詩に俳句にそれぞれ何れも皆その欄を盛大ならしめむことを期しつ丶ある。特に僕は僕一個の立場として短歌欄の盛大ならむことを熱望してやまぬ。で切に投稿家諸君の奮勵を希望する。從來一人十五首限りとあつた制限も廢して了ふ。何首でもい丶、但し無茶には困るが自ら精選して佳いのをどし／＼寄せられむことをお勵めする。そして出來得る限り、柴舟先生にお願ひして、諸君の多くの作を世に紹介したいと念ふ。然し紙數に制限があるので、從つて選拔の上にや丶嚴の加はることをも覺悟して貰ひたい。（ついでだから言ふが、大阪府堺市關西新詩社から出して居る雜誌ホノホといふのが盛んに短歌の投稿を歡迎して居る。柴舟先生や車前草社の一連の作物も常に出て居る。新聲に入り切れなかつたならば此處に一殖民地を

開くも面白からう。先日も韻文號とか稱へて素晴しいものを發刊してゐた。試みにこの雜誌を見て見給へ、代價郵稅共十三錢）

○車前草社と云へば、既う失くなつたもの〻やうに噂して居る人があるといふ。とんでもない話だ。現についこの以前にも先生を初めわれ〱三人が近郊を散步して、その歸り路、淀橋の十二社で痛飲して各自の法螺を吹き合つた位ゐだ。同社の一人でも存在して居る限りは車前草社の嚴存して居ることを認めて貰ひたい。そして吾々同人の作物の表はる〻所、その何處たるを問はず、何れもみな車前草社の詠草である。

○どうも短歌壇は時代一般の聲を度外して居るやうだ。小說界長詩界に於てやかましく繰返されて居る評論上の言葉の中には、吾々短歌をやる人の聽くべき言も決して少くない。然るべき斯界の評論家の無いだけ、吾々作家の方でとりわけても注意すべきことだらうと思ふ。そしてなるたけ實世間と接觸して、習慣形式等あらゆる桎梏を排除し、一點陰影の無い全自己を三十一文字の上に表したいといふ僕の祈願である。歌といふと何となく吾々人間の普通に謂ふ汚い所を包みてやんごとなき美しき點のみを歌ふもの〻やうに今尙ほ思つて居る人が多い。習慣に捉へられた眼で汚く見ゆるもの〻中には云ひがたい絕對美のふくまれて居るものではあるまいか。

○明治四十一年は程ちかく迫つて來た。肅然としてまたこの新しき研究區域に入らむかな。



## 所謂スバル派の歌を評す

編輯務で忙しく、この項の筆を執るのが大變遲れた。今迄に集まつた同人諸君の本論評を見ると、所謂スバル式の歌風に對しては早や殆んど餘す所無く言はれてある樣に見受くる。で、私は最初の豫定には反するがその所謂を略いた眞の意味の——も可笑しいが、常にスバルに由つてのみ多くその作を發表せらる〻先達諸氏の歌ひぶりに就いて、自分の質素な感じを述べようと思ふ。

與謝野氏夫妻を初めとし、平野、茅野、平出、吉井、北原等の諸氏、何れも並々ならぬ才能を驅つて縱橫に歌ひ出でらる〻所に個々充實せる特色のあるは改めて言ふまでもない。けれ共それ等一體の咏みぶりを貫いては矢張り爭はれぬ潮流の流れて居るのも事實である。卽ち如何にも歌らしい歌、藝術らしい藝術、我等の見る所を以てすれば根底の無い歌、浮いた歌、枯れた歌、作つた歌、人形歌、まだ言ひ得やうが要するに斯の種の型にはまつた歌風に一致して居る。

私は曾て晶子女史の『佐保姬』を評して『佐保姬』には歌ばかり書いてある、晶子といふ人は出てゐないと言つたことがある。既往同氏の作られた歌は何百或は何千首かあるであらうが、夫等のうち

の一首々々は皆誰が作つた所で差支へのない歌が多い。晶子といふ人間、唯一絶對の或一生命とは殆んど何等の關係が無い、極めて普遍的に遊離した、雲の樣な歌が多い。歌としてはそれは如何にも美しいのがあり、をかしいのがある。けれ共不幸にして我等はたゞ眼さきをのみ刺戟せられて終る事が多い。歌を見て歌にのみ讀者の感じの留る事を私は歡ばぬ。歌をば唯だ一種の方便として、その奥に作者の影が、否な作者そのものが一杯に動いて居るのを以て滿足とする。歌そのものを見るのは私のねがひでない、歌を透してその作者の生命を見む事が私の希望の全てである。

晶子氏の作に對する斯の私の不滿は擧上の他の諸氏に對して總體に普遍して居る。特に寛氏の歌は別してもその作つてある所が眼に立つて、寧ろ見るのが苦しい。歌とは斯う作るべきものだといふ知識が常に先走つてゐて、叙景叙事並びに抒情、何れの歌を見るも實に巧みにそのこつが捉へてありかなめな所が睨んであるが、要するに作られた歌は死んで居る。この人は自分で月並調の改革を企てゝおいて、今また改めてそのお隣の月並調に移らるゝのではあるまいかと、よく私等には思はるゝ。俗に逆さに吊して擲つても鼻血も出ないといふ諺がある。修、蕭々二氏の歌を形容するに何だか適當した言葉のやうに思はるゝ。枯れ渇いて、痩せ細つて居る所などはいかにもよく適合する。特に修氏が近來切りに強ひて作つて居るデカダン張りの歌を見ると、白髪を塗つた婆さんの吹く鬼灯の音を思ひ出さゞるを得ない。吉井氏の歌は近來一向面白くなくなつた。もとはその味みぶりには同意しない



ながらも見る事だけは非常に面白く思つたものであるが、近頃は何だかひどく生氣を失つて來て、見ても一向興を惹かぬ。氏自身のしば〳〵語らるゝ所として傳へ聞くに、氏は近來酷く歌といふものを輕視して居らるゝ相であるので無理もない話である。然し何と言つても氏と晶子氏との作だけは實に眼中物なくすら〳〵と思ふ所に走り走つて自由を極めて居るのはよそながら痛快である。スバル派の人の中で、最も內容の充實して居る歌と感ずるのは平野氏の作である。最も私には痛切に響く。物に騷がず靜かに落着いて咏んだといふ樣に見える中に歌に強い所がある。但しこの人も才人の一人、四周の動搖には遲れまいとして、種々に試みる。で、氏の歌の並んで居るのを見ると一首と一首との間に誠に烈しい不調和が動いて居る。私は氏を何處ぞ遠くへ隔離したくて仕樣がない。海の中の離れ島あたりへでも唯だひとり置いて心のまゝに歌はせたら、どんなにいゝ歌——歌らしくない歌が出來るであらうかと常に思ふ。歌のために氏の眼をつぶし、耳を破らむことを請ひ願ふ。

上に擧げた諸氏と聊か赴く所を異にして、最も眞劍に歌を咏んで居る人に北原白秋氏がある。もつとも氏自身はスバル派と云はるゝ事を承認せず強くそれに對して拒否の念を持つて居らるゝが、私は此處にさまで深い意味の詮索をせず、行きがかりの便宜上、本欄の中に收めて氏の作に對し寸評を試みむと欲する。氏に取つては官能卽宇宙の觀がある。一切の歸依、解決？ は一にその鋭い、デリケートな感官に由つて求められ滿足せられて居る。手近にないので親しく此處に引照するを得ないが、

氏は『邪宗門』の序文に自らそれに類したことを揚言せられて居たかに記憶する。氏のその鋭敏な感官に觸る丶あらゆる微細な感じそのものは、よしやそれが假空的のものであつても、氏に取つて直ちに動かす可からざる實在となるのである、氏の全生命はその時、一にその感じそのものに由つて存在する。氏はこれを確信して咏んでゐる。されば氏の歌には他の諸氏に見る樣な浮薄な所がない。入るを容さぬ氏單獨の境地に極めて眞面目に氏一人が住つて居る。氏の感覺には、晶子氏に見る樣な傳習的な謂ふ所の趣味なるものがない。感覺そのものが赤裸々に躍つて居る。これ氏の作に清新の匂ひ橫溢する所以である。私なども斯の樣な瞬間の感覺にその時の自己の存在を見出すことが多いので、氏の作をば深く愛好する。而かも私自身を主にして考ふる時には此等の氏の作に對してなほ幾多の不滿足を感ぜずには居られない。第一、氏は餘りに枝梢の感覺に醉ひ過ぎはしないか、餘りに感覺を强ゆるに過ぎはしないか、餘りに一面の限られたる感覺に沒頭し過ぎはしないか。是等の諸點は終に我等をして同じく一面の浮きたる歌、離れたる歌、作られたる歌のうらみを懷かしむるに傾いて行く。

馳足の短評、自ら甚だ意を盡さず、諸氏に禮を缺く事の深きを恐る。勿論私は此處に專ら諸氏の缺點と見ゆる諸點をのみ引いて來た。美點長所のさまざまなるは今更我等の口を出す迄もないことであるからである。擱筆に當り、附和雷同に最も神經過敏にして、尊重すべき先達諸氏の折角の新しき試みを常に滑稽の結果に終らしめ、加之延いて斯の先達諸氏を自繩自縛の窮地に陷らしむるスバル派末



輩諸君の擧動を深く同派のために惜まざるを得ない。——明治四十三年二月十日夜——

# 二月の歌（明治四十三年）

○新潮

金子薫園。「一月の雷鳴」

今迄のものとは一寸違つた味ひがあつた。いつもの艶が脱れてや丶重々しい所も見ゆる。好きなのは次の三首、

一月の雷鳴をき丶さかづきをおきたる友の蒼白き顔

松とれて俄かに街のさびしさをおぼゆる日より病をえたる

さめぎはの酒のおくびの不快なるこころを永く忘れざるべし

それだけのことゝわざとらしい歌も少くない。例へば



初雷の二日酔してさめやらぬ頭の底にうちひびきけり

東京の街をいろどる色彩を眞白くかぎり日夜雪ふる

雪白きかの三階のあなたより剝がるゝやうに青空となる

第一調子に（いつものことなれど）少しも落着きがない。ほそ〳〵としてゐるか、おど〳〵としてゐる。誰であつたか金子さんの歌は子供がコップに水を盛つて歩くやうだと言つたが、蓋し當つてるだらう。

岡稻里、「雪と青菜と」

年のはじめ霜にかじけし青ものにこころいささかうるほひをもつ

これは說明。

吹雪の日ことさら家の者どもを親しくおもふこころさびしき

これは月並。

次の數首を採らむ。

いたましく踏みにじられし野のくさのまた遲
々としてもゆるがごとし

鳥がまたたちかへり啼くおき藁の上より雪は
じめじめと消ゆ

よわよわと女ひとりの步み來しここまでのみ
ちをおもひやるかな

絹絲のやうにひかりて靑き鳥木の間をついと
立ち去りにけり

、、、符の所の調子は甚だ融和してゐない。新潮の歌は大變溫健なことが看板であるやうだが、溫健は平板無事をのみ意味するものではあるまい。堅實な溫健が望ましい。

內藤　晨露、「彼女に別る、夜その他」

くちづけよりしづかにはなれいでゆきし女を
しばし見送りし戶よ



ひとすぢの川のみ黑うながれたる淋しき雪の
ふるさとを出づ

濁川あかずながる、たそがれの戶外いつしか
雪ふりいでぬ

の三首を拔く。中の一首は佳い歌だ。

○心の花

何十人かの歌が並べてあるが、皆をぢさんの幼稚園と云つた姿で、一として我等の心に觸る、ものがない。其中に唯一人や、異色ある作者を見出し得たのをよろこびとする。

小柳　長岡、「我れかくて」

若過ぎかと思はる、ふしもあるが、この雜誌中では確かに唯一人であると思ふ。

うつすりと月があらはれ何處となく糸の音ひ
びく河岸の上げ潮

一人居ることに耐へかね灯の街をあゆめば更
に君の忍ばゆ

我が心とすれば沈むあひ逢ふ日樂しく待つと
云へる下より

悲しきにあらねど胸のせまりくるあゝ夕風に
浪の響す

最後の一首は下句は佳いのに、惜しいかな上句が説明になつて居る。

他に森田義郎氏の「歳晩懷在故鄕病家兄」といふ長歌がある。長歌といふのが珍しく思はれた。その反歌には流石に重々しい快い感じを誘ふものがある。三首ばかり引いて見よう。

物言へば聲もこほらむ寒き夜をすとうぶひと
つまゐらせもせず

その目のつかるゝまでもうちまもりおなじ藥
を見てやなげかす

物思はあとかたもなくていねがてに聲なき妻
を起きかへり見し

古代の調子で、割合に現今の生活が歌はれてゐるかと思ふ。この調子で今少し強く自由に行かぬものであらうか。



「心の花」を見るごとに自分は橘糸重子女をおもふ。往時女史は同誌唯一の眞の詩人であつた。昨今の消息がきゝたいものである。

○文章世界

窪田　空穗、「薄氷」

先づ廣告を見てひどく期待しただけに、落膽の度も強かつた。依然として眞摯の氣のみは三十首近くの歌に缺けてゐないので、どれを見ても不快な心地はせぬがそれにしても何故斯う平板に力弱くなつたらう。どれが斯うと出來不出來がないので引用しての紹介に困るが、玆には流石にと思はるゝ技巧の勝つたものを採つて見る。

つと船は岸を離れついにしへの大堰のながれ
われを載するも

さらさらとさらさらとしも呟ける音をし呑み
てどと波の鳴る

夜深き海の香よりや現はれしあな寂しさが來
ては背を打つ

同じ技巧でも與謝野氏などのには時として厭味をおもはするが此人のにはそれが無いのが嬉しい。

西出　朝風、「そのころの歌」

口語調で作つてある。斯うなつても矢張り三十一文字形を追はねばならぬ必要があるのだらうかと不思議に思つた。心もちは浮いた調子で咏んであるのではないらしいが、出來た上から見ればみな浮き氣味だ。口語と砕けたならいつそ他の詩形に飛んだが適當かと我等は思ふ。試みに二三を引く。

　その人も泣いて別れた。この人も泣いてわかれる。夏柳かな。

　尋常の二年へかよふ君ちやんと手をひきあるく、戀人のやう。

　戀びと等物借るよりもたわいなく生死のことを今日も誓つた。

この人の眼のつけ所は一寸土岐哀果君に似て、もつと輕く言ひ下してある。

○あららぎ

數ある雜誌の中で、讀んで可懷しく、尊敬の念を起さするといふ種類のものは今のところ極く少い。



唯だこの「あららぎ」などはいつ見ても實に快く忝く思はする一つである。

伊藤左千夫、「冬のくもり」

主觀がいかにも透徹して、動きの無いのは此雜誌に據つて居る人々の歌によく見る特長だが、中にも左千夫氏の作などには別してそれが強い。浮いた所が少しもなく歌の瞳がちらついてゐない。たゞ並ならず精練せられたためか現實と直接の交渉がないやうに思はるゝことが多いが、そこが卽ち純藝術として客觀化せられた主觀の到達すべき所だとも言へるだらう。玆に數首を引く。

　霜月の冬とふ此のころ只曇り今日もくもれり思ふこと多し

　我がやどの軒の高葦霜枯れてくもりに立てり葉の音もせず

　冬の日の寒きくもりを物もひの深き心に淋しみて居り

　よみにありて魂靜まれる人らすらも此の淋しさに世を戀ふらむか

　我がおもひ深くいたらば土の底よみなる友に

　　盡し通はむ

中村憲吉、「雪來る前の歌」

　日のくらみ野にみちくればこもり居る我にか丶
なしく心ゆらぐも
　泣きあとのみだれ見せむをいさ丶恥ぢ繕ろふ
汝をいたしく思ひき
　なごみ〳〵談らひす丶めばおのづから汝が面
晴る丶に我が心さへ

柿の村人、「野の上」

　この朝げ霧おぼろなる木の影に日のけはひし
て禽鳴きにけり
　冬川原日にけに涸る丶水を追ひて菜洗ふ娘ら
の集りにけり
　短か日の川原をいそぐ乏しらの水のあよみよ
寒けかりけり



　一首々々注意して讀めばみなそれ〴〵心を惹く。けれどもいつぞや此の雜誌が「別離」の歌に對し
て批評を下した時、諸氏等がどういふ態度で歌を咏まる丶かを一寸のぞき見て以來、どうもその態度
に我等は贊成が出來難い。諸氏の作を諸氏の作として見る時は誠に面白い。が、それが我等に交渉が
無い（少くとも薄い）といふことは悲しい事實ではないか。ついでに一言書き添へておく。あの「別
離」批評の際、小生より諸氏に答へた言葉の中に、ツイ逸づんで書き下したこと丶て、面白く言つた
つもりのものが人身攻擊をするものと見做されたやうな文句があつた相だ。飛んでもない間違ひであ
る。尙その外誤解から誤解を生んだことが多かつたが一々今更辯解するまでもないと思ふので省略す
る。當時直ぐ御返事すべきが禮であつたらうが、旅に出て知らずにゐた。遲れながらお詫のつもりに
書き添へておく。

○すばる

長島豐太郞。
氣のせゐか、ひどく變化が見えたと思ふ。
　わが夢の赤きしづくはたちまちに大河となり
て父をへだてぬ

くれがたの二月の凪のまつはればわが前垂も
灰色に泣く
ひそみたる眉のあひだをたもとほる運命のか
げ死の鳥の影
君の來し輕車のあとの水色にくぼみてにほふ
春の雪かな

といふやうなのが今迄僕の眼に映つてゐた此作者の作風であつた。所が

父の子は父によく似て歪みたる心をもちゐた
えずうらぎる
飼はれたる獸のごとく事ごとに讀まむとすな
り父の眼のいろ
比類なき不孝のわれもかなしみぬ怒りのはて
に母の泣く時（上句は寛氏のいやな調なれど）
われ弱しあはれ短氣の父に媚び邪慳の母に甘
えむとする

などいふ詠みぶりのが今度は多いやうに思ふ。我等は讀んで、無論後者を喜ぶ。在來の所謂スバル調ならば、よし作者は十人あらうが二十人あらうが歌はみんな同じものとしか思はれなかつた。個性の現はれは勿論、歌に血の氣も無いもの丶やうに思はれたものだ。生き者を盛る古い壺の一日も早く破壞せられむことを我等は祈つて居る。

前から好きであつた和見夕潮君の歌を見ないのはうら淋しい。そして二月號は特に淋しい。長島君の外はみな投書から成立つて居る。



○秀才文壇

富田　碎花、「逃亡と死と」

一生懸命といふまでに眞面目な所は嬉しい。唯だそれが過ぎて、一句々々是でもか〳〵と讀者に強ひる傾きの見ゆるのは弊だ。その例、

わが身から逃亡もせむ死にもせむ君を愛する
あまり君より
や丶にして靜座に耐へぬまでなりぬ何おもう
てのか丶る不安ぞ

など、みな多少その氣味がある。今迄には特にそれが多かつたが「逃亡と死と」には少いので嬉しかつた。尙ほ好んで不消化がちの言葉を使ふやうに見受けられるのと、常に事象の表面の觀念のみを捉へて居るのが此人の損だ。好ましき作二三。

　かゝる宵にいづこの寺の禮拜の鐘ぞたださへ
　人戀しきを
　狂ほしう逢はまほしさに郊外の夜の停車場に
　來ておどろきぬ
　戀人の別れ居ぞげにあはれなる病ひある日も
　凭る肩のなし
　鮮紅の襯衣の毛絲のほつれなどかなしきこと
　をおもはさす夜

歌は矢張り正直な、理屈拔きのものがいゝ。

近藤　嵐翠、「たゞ悲しく」

富田君のぎこちない所が此人にはない代りに、ともすれば歌の弱過ぎることがある。一方が油繪ならこちらは水彩畫と云つた形だ。「創作」の一月號では僕は近藤君のを最も喜んで讀んだのであつた



が、「たゞ悲しく」のなかにも佳作が多い。

　山の手のさびしき家に移り來てあはれや今朝
　もひとり起き出づ
　汽船より荷あげ人夫のかへるころ我もつかれ
　て家にかへりぬ
　南方の鑛山國の港の夜蕩兒かなしく街をあゆ
　めり

○三田文學

與謝野　寬、「落木集」

眞先の、

　われの齡やゝたけ斯かる朝を愛づうすき明り
　の藍色の山

は此人獨特のゆつたりした姿が見えて、他に見られぬ好い歌だと思つた。尙ほその他、

　野を燒ける名殘のけぶり庭に入り這へばしづ

くすわが檐の霜
多くれど短きころもあはれなるわが娘等は膝
のあらはる
毛を垂れて骨出でし馬三つばかりわが門すぎ
て冬の日の入る
妻を見て寒く笑ひぬ貧しきは面をそむけて泣
く暇も無し
太やかに曲るぱいぷを啣へつつ顔をしかめて
組めるうしろ手
片隅の卓にはなれしかの人も寒くやあらむ前
のさかづき
しばらくは君が髪をばまさぐりぬ舞臺の上の
若人のごと

など、何れも同じ趣きが見えて居る。

けれ共、わざとらしい歌、生氣なき歌、安繪具を塗抹した樣な歌、などと思はるゝも眼についた。



特に今度は色彩の配合が愈々わざとらしく濃厚になつて、見てゐていやな氣になつた。

青白き萩の葉風にひろき野の入日の朱をば消
して降る雪
青やかに二月の朝の海明けて赤き切崖雪をい
ただく
いなづまに髪青き鬼乘りて馳せ無邊に投ぐる
白き髑髏

など何れも三色版ものである。そして大概の歌には必ずのやうに白とか赤とか青とかの文字が入つてゐた。象徴ぶりの歌と見ゆるものも多かつたが、何といふことなく我等はまだそれに心を惹かれない。前にあげた毛を垂れし馬といふのにも其風味があるし、他に、

蠟燭を誰が家よりか啣へ來て枯木にとまるさ
びしき鴉
紅き鳥なにに驚く鳴きさしてわれの夢よりを
ちかたに逃ぐ

なども左樣だらうと思つた。僕などは今少しわざとらしくなくして斯う行きたいものと思ふ。兎に

角二月中で質量共に見ごたへのあつたのはこの「落木集」であつた。

以上で僕の身邊にある雜誌（歌の載つてゐる）は見盡したことになる。他に「帝國文學」「東亞の光」に多少の歌が出てゐたが手元にないし、曾て見た印象によれば是と取立てゝ言ふべきものは無かつたかと思ふ。帝文の歌の載せかたの粗笨なのにはいつも乍ら驚かされる。載せる位ゐならもつと如何とかしたらよささうなものぢアないか。ひとごとながら齒搔ゆく思ふ。「東亞の光」には每號（？）金澤美巖君が其月々の歌壇の批評を書いて居るが、熱心と眞面目な態度には敬服する。唯だその見かたは大分怪しいもので、僕一個から見ても今まで佳いと云つて引かれ惡いと云つて引かれた例證の歌に曾て同意出來るものが殆んど一首も無かつたことは事實である。その努力に對して世間に一向反響の起らないのも恐らくこれに原因してゐるのかと思ふ。

他は一に「創作」あるのみであるが、これは紹介するまでも無からう。



# 『山河』を讀む

一度しみ〴〵と熟讀した上で金子薰園氏の歌に對する我等の考へを述べて見度いと念つてゐた。それを果さぬのみならず、茲にまた極めて匆卒の間にこの『山河』の批評を書かねばならぬことをいかにも不滿足に思ふ。

『覺めたる歌』に滿ちてゐた混亂は本集に影を沒して居る。水のうへか、くもりのない鏡のおもてに影を落す樹か草か花か、或は遠き山河のすがたはやがてこの『山河』に見る靜けさである。曾て大人氣もなく取り亂された氏の歌に思はず眉をひそめた我等は、茲に先づ何とも云へぬ安堵を感ぜざるを得なかつた。

そして、自然に我等の心を惹くのは、次のやうな歌であつた。

ならはしのごとく眼ざめぬ花賣の白川出でて來る朝明け
下加茂の森をあゆみて木洩れ日の黃なるを見れば秋とおどろく
話なかばオルガン鳴りて窓外の高き芙蓉に秋かぜの見ゆ

初夏の葵まつりのころに來むとばかりいひて別れ來にけり
かへり來て二日三日はまつはれる旅のこころのなつかしきかな
秋來ればとつぎゆくてふなまめける人の假寢を次の間に見る
えりあしの白きに蠅のとまりゐぬつくづく見ればうら若きかな
こころうくかへりみらるゝ東京の空雲もなく晴れわたるかな
五浦の五つの入江あゐいろの波おだやかに松のかげする
大漁の鰹の腹も背も光る月夜の濱の人のどよめき
なりはひの蜑の兒がする物眞似に釣すれば章魚のかかり來にけり
夕くれて繪卷の中に見るごとき一もと杉に海の光れる
松山のしづくしたたり舟の帆のぬれたる色に日の光りけり
むらだてる松うごかして海の風鳴れる勿來のさびしき夏かな
ロつくれば酒のにほひも苦からず暮春はもののなつかしきかな
あたふたと樹蔭の椅子に身を投ぐることあり春の暮れゆくこのごろ

など、何れとして微塵も曇りのない濁らぬ歌である。私は此等こそ眞個の薫園氏の結晶したものであると思はれてならぬ。是等に對し、理窟はおいて、作者自身にも我れ歌ひ得たりと思はるゝことは無いであらうか。他的刺戟に追はれて、まごくしながら眼をつむつて手早く作つてのけたといふ不快から遠く離れ得らるゝことは無いであらうか。瞑目此等の歌を誦する時、他人氣混らぬ可懐さを覺えらるゝことはないであらうか。天上天下唯我獨尊の聖い靜寂な境地を感ぜらるゝことはないであらうか。



佳い歌は引けばまだ多からう。以上はほんの始めから四五十頁までの所で拔いたものである。その間にまた甚しく慊らぬ個所も少くなかつた。何はおき私は氏の歌から說明歌を驅除したくてならなかつた。卷頭の一首から早や說明である。

晩夏の京都に入れば蒸すごときあつさの中の青き山河

蒸すごときから最後までは全く說明である。なぜ其の蒸す樣な暑熱の中に靜まりかへつてゐる舊都の意味多い山河の翠滴る姿を直寫せられなかつたらう。斯んな報告書や見取圖の中に打込んでおくのは誠にこゝろない所業であらう。

一首全體が說明から出來てゐるのが多いと同時に、一首の中に、各句に說明そのもの、句がまた多い。のみならず、さうでなくとも、不消化の句が多い。力の無い句が多い。

花賣のすずしきこゑのしみ來り寢たらぬ腦のしきりに痛しい
天龍寺の屋根の瓦に秋かぜのわたるを見つつ半日を消す

萩いまだ咲かず寺内は秋の水打ちたるごときしづけき朝かな

など、今少し言葉を言葉としてのみ使用することをせず、直ちに其場の情緒氣分の一片であるとして用ゐたならば、單にこれ等報告に止まることなく、その境地そのものが出て來たらうものをと殘念に思ふのである。

長所及び短所と見る兩方面の頂點だけを認めて一先づこの稿を終ることにする。いかにも自他に對して不愉快だが、時日と紙數に制限せられてゐて致し方がない。他日改めて金子薫園氏全體の歌を批評する時があるであらうと思ふ。



## 最近歌壇の印象（明治四十五年）

我等同人は今後毎號本誌上に於てその前月に表れた一般短歌界の現象に對し斯の印象記を作ることにきめた。混沌を極めた現時の斯界に對し、此等我等が忌憚なき自由の批判は必ず多少の寄與する所あらむことを信じてゐる。

○春の小雪（新潮）服部嘉香

「青海波」を讀みて其作者に送りし歌……といふ斷り書きが添へてある。送りしとあるからには眞實此等の歌を晶子女史の許に送つたものかとも思ふ。女史の驚愕さこそと察せられて笑止の至りである。その歌といふのを初めから二三首紹介して見よう。

君はただ波を見るさへ涙する弱き女のひとり
なりしかな

弱き者よかく呼ばるるを誇りとし君は泣くべ

しかの昨日より
晶といふ女の名こそ悲しけれその名を持てる
女一人の

尙ほ其他に「江戸川小櫻橋の上に立ちて」といふので

逝く水を眺むるよりも來る水を見るが嬉しき
橋の上かな

電燈のさせるかぎりは皺よせて媚ぶるがごと
き江戸川の水

といふ種類のものが並べてある。

批評家である服部君にお尋ねするが、君は短歌といふものを馬鹿にして斯んなものを作つたのか、それとも眞面目に此等を眞實の詩歌であると信じて作つたのか。

○濕れるわか草（同）金子薰園

例によつて氣の拔けたものだが、全然棄てられないのもある。

陽の入りし遠野の空をながめつゝ、しめれる如
き若草をふむ



春の靄山にかゝれりしづかなる夕よとあゆみ
とめて仰げる

この人の所謂叙景歌に就いては他日稿を別にして論じて見度い。

○薄萌黄色の春（同）岡　稻里

金子氏のと殆んど同じもので、依然力のない說明から出來上つたものが多い。二首を採る。

あたたかき三月に入るこころもち雲のごとく
にあるがさびしき

茫然とこの日もすぎぬうすき日にひよどりが
來て啼きしばかりに

○ひと時のち（同）武山英子

靄がかゝつて見たり、草が萌えたり鳥が鳴いて見たりする外に能のない新潮歌壇に於て特に異彩を放つ佳篇である。自然社の計畫の一に、その月の作物の中で特に眼についた人の作物をばこの「前月歌壇」の外に稿を改めて批評紹介するといふ一項があるがこの一篇などは先づ當然その選に當るべきであつたらうと思ふ。初號のことで手が廻らず、此儘に此中に納めておく。全篇十一首、悉く此處に引き度いと思ふ程で、

消えなむとしては保てる燈火を見つめつゝいつかわが泣きてあり

青ざめし頬を染めて親とあらそひし一時のちの身のつかれかな

夕かぜの寒くも吹けば小づくりの忙しげに動く母の眼につく

ねいりたる親のとなりに春ふかき夜のあはれをぞひとり泣くかな

待つといふ若き心に耐へがたきその淋しさのまゝにぞ生ける

西京の伯母の娘の假名がきの上手になりぬ見つむれば淋し

うつくしきえりあしを見せて仕事するあとの月より雇ひし女

春の夜のしめりをふみてわがこゝろ七年まへのものとなりぬる



など、何處を如何と取り立てゝは云へないがみな佳い歌だ。けば〲しくないだけ大向ふの受けはよくないに相違ない。が、それだけに作品が尊くなる。歌を作らうとした厭やな形跡が少しもない。讀者に强ひる所がつゆほどもない。令兄薫園氏のと誠に不思議な對照を作して居る。

○春の林（同）原田　實

考へた所をみんな文字に表はさうとするので、却つて一首々々のちからを弱めてゐる。表現せむと思ひ立つた主題に就いて餘りに此作者の神經質なのを惜む。浮はつかず、常に何物かを考へつゝある趣きは一首か二首の歌にもよく出てゐて可懐しい。

三つ四つは春に浮きたつ鳥の音か春の林の靜かなること

春の樹々いつか芽となり葉となればこころにくゝも啼く春の鳥

眼をとぢてあさき林に春を聽くわれおとろへをなつかしみつゝ

春の樹に小鳥啼くごと晴れやかに起きえば仕

事いかに進まむ

他に小澤紫紘其他諸氏の作が數多あるが、何れも水の上に水を注いだ樣な、輪廓も無ければ心核も無い所謂優婉嫛嫕調に恐れをなし讀了するを得ずして引退がつた。また一首讀んだところで百首讀んだところで同じものにしか見えないのが斯の詠みぶりの特長であるのだらうと信ぜらる丶。非か。

○未だ生れざる愛兒（詩歌）內藤晨露

だいぶかた言の歌が多い、言はむと欲して而して口が充分に廻らない趣きがある。しかもその言はむと欲する所といふのも餘所目にはただ徒らに然く云はむと欲して云へるのみと見えるのがあるのは憾むべきことだ。語られた事實の形骸の悲慘は見えて而かもその本來本質の悲慘は藻拔けの態となつて居る。だからこの概念的の連作から脫せしめて次の如く一首々々引いて來たら屹度眼立つて見えるに相違ない。

春來りぬ樹々の芽のほころびゆく如く我のや
まひのあらたまるらし

汝の手紙にわけなく淚ながれたりこのま丶に
なほ少しねむらむ



一本の草花のごときさびしさに汝みづからも
生きむとするらし

舟の如く搖る丶體をいかにせむいま死にゆか
ばわれいづち行くらむ

どうも然しかた言だ。歌に核がない、熱がない。

○春（同）近藤元

これも近來の此人の詠みぶり、例の麥藁細工式の歌に外ならない。幼稚な衒氣、獨りよがりから、多人數の前でぐる／＼廻りをして得意になつてゐる有樣が想ひ浮べられて悲慘である。いい加減の他人の口さきから生み出された所謂豐かなる天分なるものに釣られずと、たとへ豐かならずとも自分自身の天分に立返つた方がよくはないか。一寸でも世間といふものから眼を離して自身の上にその黑い瞳を落して見給へ。

眼を開けばわれらの愛のふるさとが杳かなり
けり春來る空（初めより三首）

春は來る女よ汝が肉體にさす明るさに恐怖は
なきや

春は來ぬそのやはらかき日光を額にうけてな
みだぐむ女

など、斯の種の歌に無くてはならぬ熱も脂肪も匂ひも何一つありはしないぢアないか。有るのはただ悪繪具で染色せられた概念ばかりである。君のいはゆる赤きまぼろしであらう。麥藁細工の評語の所以は此處にあるのだ。僅かに次の數首を採らむ。

やはらかき光の中に狂ほしく波と波とが抱き
合ふを見よ

とりとめなき春の心に飛びまはるうれしさう
なるかもめの群よ

おとなしく男の腕に抱かれて二月の夜を斯う
して居たまへ

なにかしらうすらさみしき春の夜の女の肌の
やはらかさかな

○寂　寥　（同）中村琢郎

鐵工場の隅に落ち散つてゐる鐵屑で作りあげた、とでも言ひ度かつた以前の此作者の咏みぶりが本



號に於て著しく變化してゐるのを見る。歌に血が通ひ始めて來た樣で、誠に歡ばしい。

まぼろしのごとき來しかたまぼろしのごとき
行くすゑ涙しづかに

生くとふはかく在ることか冬晴れの空もつめ
たし地もつめたし

死をわすれいのちを忘れ山頂の雪に沁みたる
落日を見る

あてもなき人戀しさや晴れわたる空のそこひ
に映るわが影

○冷たき天地　（同）金子不泣

どうも內容と言葉と一致してゐない。だから自然輕々と看過するべく餘儀なくせられて了ふ。詩は決して語るものではないのだ。

大空を渡る小鳥の瞳に燃ゆる春はいたまし草
に夕陽す

相ともにあれば戀ふるを知らざりき別れとと

もにおもひ燃ゆるか

汝が指をわが掌に握りしめ泣かばと思ふこの夕ぐれを

○赤き夢と乳牛（同）廣田　樂

案外の變り様に多少驚かされの氣味であつた。でもわるくない。こつてりしてゐて而も何處かさつぱりした姿の錦繪である。おなじくば今少し水際だつた腕が見せて貰ひたいと謹んでこれからに期待する。

水鳥の夜ごとの夢にかげも濃く岸のさくらのまた蒼むらむ

みづ鳥のうき寢のゆめをしのぶにも櫻さびしき夜の姿かな

われにもなく開きし蒼おどろきに顫へふるへて一夜明けてし

水鳥の明けて見はてぬ夢さびし渦まく花をふと喰みてみる



夢におびえ啼くみづとりの眼もはるに春が流る、夜の大川

ち、牛が乳しぼらる、うつ、なさ人は牧場に春をさびしむ

人おもふ身は晝もなほみる夢をいつかくもらす沈丁の香よ

河隈に夢につかれて草を喰む身のさびしさを啼くか水とり

○甦りし春の姿（同）細谷　明

前に中村琢郎君に對して述べた評語をすつかり此處にも持つて來度い。而して心から諸君のために今春を祝福したい。

雨の原青麥のいろしめやかに細きこゑして鳥も淋しからむ

枯草のごときベッドと死のいろの壁にしづかにあそべるいのち

ひとり死なむひとり死なむわが寂寞の白のべ
ッドに砂もて埋めよ

○わが生命の上にひるがへる旗（同）梶　秀也

初め一首二首と出來たてに手帳のまゝで見せられた時には、何だか一寸オツなものだといふ氣もしたが斯う並べられるとその缺點がようく解る。要するに此等はまだ詩の附燒刄である。一寸眼さきでちらちらしてそして跡かたも無く消えてゆくものである。一寸象徴的なものと見違へらるゝかも知れぬが、悲しいかな其底に根を持つて居らぬ、實を持つて居らぬ，一寸斯う言つて見たに過ぎぬものである。そして終に詩は口さき眼さきのものでは無いことがよく解る。珍らしいものだから、中でやや佳いと思つたものを引いて見よう。

今日一日われ畑を耕作してかの太陽と共に眠
るうれしさ

見れば見ればなつかしき畑なり何故にわれは
耕作を止めゐたりしか

芽はいづれど實をむすぶ無し再び耕作はなす
まじわが畑まづしければ



一日一日色異りて新しく生命の上にひるがへ
る旗

わが小鳥歌ふを止めば汝は默して其可愛き眼
に涙湛ゆるのみにてあれ

○憂愁の島にて（同）後藤夢花

みづから象徴詩の名乘を擧げて作つてあるものである。而して僕は前に『生命の上にひるがへる歌』に寄せた評語を其儘この上に適應するを以て最も至當だと考へる。僕は斯ういふ新しい（?）企てに對して、せめてその作物の巧拙を論ずるだけの地位に立ち度かつた。此のまゝでは既にその作者の出發點が間違つてゐるのを認めてゐるので、多言する餘裕が無い。然し此等の作者、或は他の作者によつて此等皮相の作物以外にや、此等に類似して而かも甚だ異れる眞個の作物の出でむことを希望し、而してそのために此等の作者の努力も强ちに無益ならざらむことを信ぜむと欲するものである。

夜に紛れてひとり島にぞ渡る船篝火に響く暗
き櫓の音

跪つき涙はらはら祈るかな闇の底ひの跡なき
ものに

憂愁は海のあなたの花なりや水線に湧く黎明
の陽よ

○ありし日の歎き（同）狹山信乃

四月は奇妙に女性作家の得意の月であつた。『詩歌』四月號に於て最も纏つた作物を求むるならば即ちこの一篇である。群雄割據、血腥いこと夥しい本誌に於て流石は女性の優しみも見え、物に騒がぬ咏みなれた口吻も心憎い。『詩歌』の歌で聲に出して歌つて見ようかと思はるゝのは先づ此人のもの位ゐのものだらう。

思ひうみなげきつかれしいやはてのあはれに
なりぬ人もわが身も

くもり日のにぶき光りにさく花のはかなきさ
まもあはれなるかな

春きたりもえいづる草のひともとの力にもな
ほおびゆるいのち

よろこびにはぐれたる子は春の日もさびしく
ひとりうた〻ねをする



春あかき日にふるへ咲くフレジャの花にもわ
れのさびしさのみゆ

春わかうもえいづる血もうらかなし弱き心の
そむきがちなる

思ふことみなはかなげに消えゆきぬ春くれが
たの空のあなたへ

○日に燒くる青草（同）前田夕暮

前に擧げた内藤晨露君のは軟い片言、これはまた恐しく固いかた言だ。

わが腹をわれみづからが喰ひやぶる蟲の心を
思ひあはせつ

悲しげなる女のねがほいつよりか心に泌みて
うすらくもれる

身をふるはせ啼ける小鳥ぞこゝろよくわれの
心を刺戟し來る

初めからの三首を玆に擧げたのだが、どれもこれも今少し如何にかなり相なものではないか。第一の

は意味はよく解る。悲痛な、また世によくありがちの事に相違ない。だからと云つて斯う話して見た所で仕方が無いではないか。僕の所謂「さうですか」に過ぎない。第二は一寸解りにくい。多分作者の心が曇つたといふのであらうが、力の無いこと甚しい。いつよりかといふのも此作者だけに意味が取りにくい。いつよりともなくといふ意かそれとも平時に違つてといふ意か。若しかすると後者かも知れない。第三などは誠に佳い内容なのだが、これでは矢張り「さうですか」といはねばならぬ。三首ともみな説明である。言ひかたの拙いのを以て衿りとして居るげに見ゆる人に向つて拙いのを責むるも異なものとあきらめてはゐるもの、さすがに慊ぬこと夥しい。輪廓の鮮かな、觸ればぞよ〳〵としさうな君の特色を知つて居るだけに猶更ら斯んな生温るに對する不滿が強いのだ。わざとらしいものも多い。

日に燒くる青草のうへひそやかにおきつかよ
わき生命の重み

わがこゝろの斷面に日の濁りたる光ぞよどむ
汝れを思へば

蟲の如く魚の如く寢れば女等は思はるゝなり
肌ざはりなど



斯る種類のものを以て若し新しいと思惟して居たならば、それは餘りにも幼稚であらう。不滿は不滿、注意して見れば君の佳い所は流石に曇りなく光つて居る。僕の苦言をば僕の苦言として取捨して欲しい。

われ等いま昨の甘さを思ひつゝ顏そむけつゝ
味なき實を喰む

忙しければ「吾を」あはれみ痛むなし我心をば
見じとす心

たそがれの暗き厨に押しだまりわれ歸れども
汝は知るなし

世の常のよろこびに疾く殘されて靜かなりけ
り悲しきふたり

我が顏を見ぬやうにのみこころする汝が眼を
追へば汝は悲しむ

恐しき人のこころに觸れぬやう世のすみに妻
よ小鳥飼はまし

擧上の外に普通の白日社々友の詠草が澤山ある。その中に却つて佳いのがある樣だと僕に注意してくれた人もあつた位ゐだが、今號は右だけにしておく。この次、專らさういふ方面に心を注いでまた此筆を執ることにする。

○百首歌（中央公論）與謝野晶子

簡單に評するとすれば大方既うその評語は盡きて居る。此處にはたゞ數首を引くに留めておく。

人おもひ眠りをなさで朝の街ゆけばかなしき街の錆聲

野薔薇摘む青水無月の月の暈しろあざに似る下にわれゐて

的を置き弓ひく時にたからかに笑ひし父にやがて背きぬ

人群れて黑き林を眺めゐし夕方の村眼に消えぬかも

葉ひとつの香りかなしさにつみとりしおびただしかる蓬の芽かな



うば玉の夜のなき國となりたらば嘲笑をのみ人はつくらむ

うぐひすの歸り來るをうつし世のけうとき人を見るごとく見る

人々はわが話にて靜まりぬ秋はかゝりと思ふ夜かな

這ひ入りて床下などにねむらまし靜かならまし死ぬによからめ

みづからの心のごとくいちじろし金錆色のさびしき胡蝶

○さゝやき（スバル）茅野雅子

すなほな、きれいな歌である。讀みさへすればいつでもいゝ氣持になることが出來るのだが讀まずにすごすことが少くないとも限らぬのは何の罪か。

すなほなるわが黒髮をなづるにもわかき命の
惜しまる丶かな
五歳の子われにならびて琴ひくも物のかなし
き一つなりけり
うらわかき夢のごとくに風ふきぬみだれそめ
たる心しらねば
木苺のあかくうれたる谷あひに小鳥の啼ける
六月の山

○心　（ザムボア）北原白秋

おそろしく氣の拔けたものだと驚いた。いくら繪具のかげにほの匂ふテレビンだからとて是ではあんまりひどすぎやう。ひと頃の作には引かへて言葉や句の上に、つやもなければあぶらも無い。あるのは安白粉の秋波である。

なつかしきロダンの素畫の絹糸のみだれそめ
にしわれならなくに



おのがじし弱きけふ日の涙をばはふり落して
鳴ける小鳥ら
にほやかにあてにかなしくくるほしきやんご
ともなき心ともがな
ほれ〴〵とひとり坐りて泣くときのこゝろよ
さもて歌もうたはめ

『槍は鏽びても名は鏽びぬ、殿につきそふ槍持の槍の穗さきの悲しさよ』（同號所載同君作長詩「槍持」の一節）のその鏽よりも漏るゝ一しづく、やるせなきかなしみを是等短歌の上にもほしかつた。

甚だ遺憾ながら、本號はこれで筆を擱かねばならぬ。「アララギ」「車前草」「新日本」「秀才文壇」等に多少の歌を見掛けたと思ひながらそれをゆつくり見ることが出來なかつた。もつとも右の中には大したものは無かつた樣である。「アララギ」に就いては來號稿を改めて書かうと思つてゐる。

創作以外に歌論歌話も多少あつた。「アララギ」に伊藤左千夫、柿の村人、齋藤茂吉諸氏の眞面目なる研究あり、「車前草」に岩谷莫哀君の痛快なる罵倒があつたが、これらの紹介をも割愛せねばならぬ。身體も落着かず、頭も心もおち着かぬうちに時を拾つて筆を走らしたので、それだけの出來しかでき

なかつたらうと思はれて、自身でも甚だ不滿である。一號二號と筆を重ぬるに從つて我等の主張態度に漸次鮮明と權威とを帶び度いものだと希望して居る。



## 石川啄木君の歌

新しき明日の來るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど

×

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

×

そんならば生命が欲しくないのかと
醫者に言はれて
だまりし心

今までよりはまた事新しく深い意味において、石川啄木君の歌が私の心に沁みるやうになつた。私自身のために、雜誌のために、幼い評釋を書いて見ようと思ふ。

短歌といふことを強ちに頭に置かず、廣く一般の文藝界に於て、北村透谷、國木田獨歩、石川啄木などといふ人は私の心にいつも同じ光を放つて聯想せられる。性格、思想等に於ては勿論それ〴〵違つてゐたやうである。唯だ、自己の生に對する、人生といふものに對する態度が殆んどみな同じでは無かつたかと想像せられるのである。形こそ違へ、その態度はみな同じ光となつてその作品の裡に輝いてゐると思ふ。飽くまでも敬虔な、純粹な、緊張した、底の底まできはめねば止まなかつたその態度は、よし多少の深淺はあらうとも、彼等の作品の底にしみ〴〵と不盡に流れてゐる。我等多くが、また他念なく自己本然の姿に歸つてゐるとき、心に浮ぶはまことに彼等の作品である。

啄木歌集一卷を貫いてゐるものは、消さうとして消し難い火のやうな執着である。同時に無限の絶望である。造次顚沛、彼は寸毫も自己を忘るゝことの出來ない人であつた。意識して、また無意識のうちに、常に自己をのみ見詰めてゐた人である。彼は強ちに強い人ではなかつた。たび〳〵自分を茶化さうと試みてゐる。而かも完全に茶化し得ることも出來ず、知らず〳〵全い自分の姿に立歸つてゐ



るときが多かつた。その時に出來た歌がみな空を渡る風のやうな捉へどころのない好い歌となつて遺稿の裡に殘つてゐる。自己をのみ念頭に置いてゐた彼は、常に現在に安住することの出來ぬ人であつた。何か爲し得ると信じ、爲さねばならぬとあせつてゐた。そして一面彼は現實に根ざした空想兒であつたのである。悲しき玩具と自分の歌を呼んでゐたことはいかにも彼にとつては悲しき眞實であつたに相違ない。歌に限らず、彼が持つてゐた現在は、みな悲しき玩具であつたかも知れない。彼の歌の基調をなして居る絶望はその邊から生れて來たものと認めてよいであらう。

餘りに自己に執するあまり、寧ろよそ〳〵しく歌といふものを取扱つてゐたことは、却つて歌の上に好き效果を齎してゐるやうである。もと〳〵根底のある、内容の豐かな人から、殆んど無意識なほど自然に溢れ出た歌に、却つて生のまゝのその人まるうつしの眞實が、内容が含まれてゐたことは當然のことだと思ふ。彼の歌の悉くがいゝ歌だとは決して言はない。寧ろ數に於てはバカ〳〵しいくだらぬ歌の方が多いであらう。そのくだらぬ歌はこの才人が歌を作るぞといふ場合に於て作られたものであると私は想像してゐる。われを忘れて溜息をつくやうな、獨り言でも言ふやうな場合の作に、實にいいものがあるのである。彼の心は元來休息といふものを知らぬ、逸りに逸り燃えに燃えたものであつたらしい。さうして彼の歌には殆んどその面影は見られない。謂はゞさういふ自分の心をじいつ

と眺めてゐる冷たい傍觀者の歌である。自己批評の歌である。またはわびしいなつかしい回想の歌である。やるま、にやらせ得るとしたら、彼は一體何をやつたらうと、今になつて私は興味ある問題を彼に就いて抱いてゐる。嘸ぞ死にたくなかつた死であつたらうと、今更ながら追想せられてならない。その枕もとで見てゐた彼の臨終が明かに眼に浮んで來てならない。

勿論完全な正當な色わけではないが、何となく私には彼の歌が二つの部類に分たれて眺めらる、。一は他念なくひたすらに自分をめぐみ愛(いつ)くしむ歌である。一は、同じく其處から出て、持つて行きどころのない絕望をのべた歌である。それらが一緒に混つた歌も無論多い。そして私の最も强みを感ずるのは、後者に屬するものである。まるで、天の一角をかすめて何處ともなく飛び去る星のやうな、または落ち着くさきを知らぬ一個の人間のたましひの瞳のやうな、見てゐて自分の心まで吸ひ取られてゆくやうな歌が多い。試みにその數首を擧げて見よう。（本來は一首が必ず三行に書いてあるが、茲では假りに二行にして寫す、その二行の終りの所に茲ではコンマを打つておく。）

高山のいただきに登り、　なにがなしに帽子を
振りて、下り來しかな

何處やらに澤山の人があらそひて、　鬮引くご



とし、われも引きたし

こころよく、人を讃(ほ)めてみたくなりにけり、
利己の心に倦めるさびしさ

高きより飛びおりるごとき心もて、　この一生
を、終るすべなきか

この日頃、ひそかに胸にやどりたる悔あり、
われを笑はしめざり

非凡なる人のごとくにふるまへる、　後のさび
しさは、何にかたぐへむ

それもよしこれもよしとてある人の、　その氣
がるさを、欲しくなりたり

はたらけど、はたらけどなほわが生活(くらし)樂にな
らざり、じつと手を見る

何がなしに、頭のなかに崖ありて、　日毎に土
のくづるるごとし

かうしては居られずと思ひ、立ちにしが、戸
外に馬の嘶きしまで

夜明けまであそびてくらす場所がほし、家を
思へば、こころ冷し

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと、泊りし宿屋
の、茶のぬるさかな

ほとばしる喞筒の水の、心地よさよ、しばし
は若きこころもて見る

石をもて追はるるごとく、ふるさとを出でし
かなしみ、消ゆる時なし

力なく病みし頃より、口すこしあきて眠るが、
癖となりにき

新しき本を買ひ來て讀む夜半の、そのたのし
さも、長くわすれぬ

よく怒る人にてありしがわが父の、日ごろ怒
らず、怒れと思ふ



目をとぢて、口笛かすかに吹きてみぬ、ねら
れぬ夜の窓にもたれて

家を出て五町ばかりは、用のある人のごとく
に、歩いてみたれど

手も足もはなればなれにあるごとき、ものう
き寢ざめ、かなしき寢覺

曠野ゆく汽車のごとくに、このなやみ、とき
〴〵我の心を通る

新しき明日の來るを信ずといふ、自分の言葉
に、噓はなけれど

よごれたる手を見る、ちようど、このごろの
自分の心に對ふがごとし

よごれたる手を洗ひし時の、かすかなる滿足
が、今日の滿足なりき

人がみな、同じ方角に向いて行く、それを横
より見てゐる心

何となく明日はよき事あるごとく、思ふ心を、
叱りて眠る

いろ〱の人のおもはく、はかりかねて、今
日もおとなしく暮したるかな

百姓の多くは酒をやめしといふ、もつと困ら
ば、何をやめるらむ

眠られぬ癖のかなしさよ、すこしでも、眠氣
がさせばうろたへてねる

この四五年、空を仰ぐといふことが一度もな
かりき、斯うもなるものか

ドア推してひと足出れば、病人の眼にはても
なき、長廊下かな

そんならば生命が欲しくないのかと、醫者に
言はれて、だまりし心



もうお前の心底をよく見屆けたと、夢に母來
て、泣いてゆきしかな

わが病の、その因るところ深く且つ遠きを思
ふ、目をとぢて思ふ

かなしくも、病いゆるを願はざる心我にあり、
何の心ぞ

かなしきは、(われもしかりき) 叱れども打て
ども泣かぬ兒の心なる

時として、あらん限りの聲を出し、唱歌をう
たふ子をほめてみる

おとなしき家畜のごとき心となる、熱やや高
き日のたよりなさ

ひさしぶりに、ふと聲を出して笑ひてみぬ、
蠅の兩手を揉むが可笑しさに

茶まで斷ちて、わが平復を祈りたまふ、母の
今日また何か怒れる

やまひ癒えず、死なず、日毎にこころのみ險
しくなれる七八月かな

泣き笑ひをしてゐる、または泣くにも泣かれぬといつたやうな歌が多いではないか。いつとは知らず頭を垂れて考へ込まねばならぬやうなものもある。

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
くだり來しかな

何といふ人可懐(ひとな)つこい寂寥ぞ。私はとある見も知らぬ高山の絶頂からつと燃え立つて直ぐ消え去つた冷たい頬を風に吹かせて降りて來る若かりし彼をまざ〱と想ひ浮べる。

何處やらに澤山の人があらそひて
鬮引くごとし
われも引きたし

いかにも不安な、おちつかぬ、寧ろ氣味のわるい印象をこの一首から受ける。



家を出て五町ばかりは
用のある人のごとくに
歩いて見たれど

つと立ち留つた時の、しいんとした濁り切つた苦惱が、親しく私の身うちにも傳はつて來る。然し、こんな苦惱寂寥は、よく〱種々の事に出會ひ、感じた複雜な聰明な心からでなくては出來ては來ぬと思ふ。歌の味ひも一般には解りにくからうかと思ふ。

高きより飛びおりる如き心もて
この一生を
終るすべなきか

一見甚だ平凡な歌である。私の所謂「さうですか歌」とも形を同じうしてゐる。而かもその裏に濡るゝばかりにぴつたりと密着(くつつ)いてゐる人間の匂ひ、輝いてゐる人間の瞳を如何しやう。肺を病む人が身うちの血を喀き盡すやうな烈しい熱氣や絶望や呪詛の心が、出るともなく溢れてゐるのを誰も感じないであらうか。

新しき明日(あす)の來(きた)るを信ずといふ
自分の言葉に

嘘は無けれど

これもさうである。希くばこの種の歌を靜かに繰返し〳〵口のうちで誦してほしい。歌の慘しいたましひがその人の心の裡に必ず甦るであらう。

もう一方の、以上引いたものよりや、形の小さい、ぢいつと眼を落した靜かな歌をあげて見よう。

いづくやらむかすかに蟲のなくごとき、こころ細さを、今日もおぼゆる

いと暗き、穴に心を吸はれゆくごとく思ひて、つかれて眠る

こころよく、我にはたらく仕事あれ、それを仕遂げて死なむと思ふ

まれにある、この平なる心には、時計の鳴るもおもしろく聽く

空家に入り、煙草のみたることありき、あはれただ一人居たきばかりに



手も足も、部屋いつぱいに投げ出して、やがて靜かに起きかへるかな

大いなる彼の身體が、憎かりき、その前に行きて物を言ふ時

死ぬことを、持藥を飲むがごとくにも我は思へり、心いためば

眞劍になりて竹もて犬を撃つ、小兒の顏を、よしと思へり

ダイナモの、重き唸りのここちよさよ、あはれこのごとく物を言はまし

氣の變る人に仕へて、つく〴〵と、わが世がいやになりにけるかな

こころよき疲れなるかな、息もつかず、仕事をしたる後のこの疲れ

よく笑ふ若き男の、死にたらば、すこしはこ

の世のさびしくもなれ
己が名をほのかに呼びて、涙せし、十四の春
　にかへるすべなし
青ぞらに消えゆく煙、さびしくも消えゆく煙、
　われにし似るか
おほどかの心來れり、歩くにも。腹に力のた
　まるがごとし
ただひとり泣かまほしさに、來て寢たる、宿
　屋の夜具のこころよさかな
この次ぎの休日（やすみ）に一日（いちにち）寢てみむと、思ひすご
　しぬ、三年このかた
或時のわれのこころを、燒きたての、麵麭に
　似たりと思ひけるかな
人間のつかはぬ言葉、ひよつとして、われの
　み知れるごとく思ふ日



いらだてる心よ汝はかなしかり、いざ〱、
　すこし呿呻（あくび）などせむ
病のごと、思鄕のこころ湧く日なり、目にあ
　をぞらの煙かなしも
わが爲さむこと世に盡きて、長き日を、かく
　しもあはれ物を思ふか
晴れし空仰げばいつも、口笛を吹きたくなり
　て、吹きてあそびき
眼を病みて黑き眼鏡をかけし頃、その頃よ、
　一人泣くをおぼえし
汽車の窓、はるかに北にふるさとの山見え來
　れば、襟を正すも
呿呻（あくび）嚙み、夜汽車の窓に別れたる、別れが今
　は物足らぬかな
かなしきは小樽の町よ、歌ふことなき人々の、

聲の荒さよ

あはれかの國のはてにて、酒のみき、かなし
みの滓を啜るごとくに

こほりたるインクの罎を、火にかざし、涙な
がれぬともしびのもと

手ぶくろをぬぐ手ふとやむ、何やらむ、ここ
ろかすめし思ひ出のあり

夏來れば、うがひ藥の、病ある齒に沁む朝の
うれしかりけり

さびしきは、色にしたしまぬ目のゆゑと、赤
き花など買はせけるかな

見て居れば時計とまれり、吸はるるごと、心
はまたもさびしさに行く

ゆゑもなく海が見たくて、海に來ぬ、こころ
傷みてたへがたき日に



ほそ〳〵と、其處ら此處らに蟲の鳴く、晝の
野に來て讀む手紙かな

水のごと、身體をひたすかなしみに、葱の香
などのまじれる夕

途中にてふと氣が變り、つとめ先を休みてけ
ふも、河岸をさまよへり

咽喉がかわき、まだ起きてゐる果物屋を探し
に行きぬ。秋の夜ふけに

なつかしき冬の朝かな、湯を飲めば、湯氣が
やはらかに顏にかかれり

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、元日と
いふに、うと〳〵眠し

それとなく、その由るところ悲しまる、元日
の午後の眠たき心

やみがたき用を忘れ來ぬ、途中にて口に入れ

たる、ゼムのためなりし

目さまして直ぐの心よ、年よりの家出の記事にも、涙出でたり

病室の窓にもたれて、久しぶりに巡査を見たりと、よろこべるかな

寢つつ讀む本の重さに、つかれたる、手を休めては物をおもへり

たへがたき渇き覺ゆれど、手をのべて、林檎とるだにものうき日かな

月に三十圓もあれば田舍にては、樂に暮せると、ひよつと思へる

病みて四月、そのときどきに變りたる、くすりの味もなつかしきかな

いつも子を、うるさきものに思ひゐし間に、その子五歲になれり



何思ひけむ、玩具をすてておとなしく、わが側に來て子の坐りたる

お菓子貰ふ時も忘れて、二階より、町の往來を眺むる子かな

子を叱れば、泣いて寢入りぬ、口すこしあけし寢顏にさはりてみるかな

是等の數十首を見るとき、いかに彼が自分を愛惜し、憂慮してゐたかゞほゞ窺はれると思ふ。そして、溫かな通常人としての彼の半面をも知ることが出來るであらう。まことになつかしい歌が多い。

右のうちでも、

稀にある……

空家に入り……

青ぞらに……

死ぬことを……

こころよき……

ただひとり……

この次ぎの………
人間の………
晴れし空………
汽車の窓………
かなしきは………
氷りたる………
なつかしき………
過ぎゆける………

などを讀むときは、今にも彼と手をとつて心ゆくばかり語つても見たい心地になる。

おほどかの心きたれり
歩くにも
腹に力のたまるがごとし

×

咽喉が渇き



まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ
秋の夜ふけに

×

目さまして直ぐの心よ
年よりの家出の記事にも
涙いでたり

どこがいゝのか解らないやうなところに彼の偉さがある。顧みて他をいふといつた風の心にくいところもある。それもさう言はうとして言つてゐるないので其間に些しの厭味がない。

もう一つ彼の特長として擧げたいのは、彼がものに眼をつけるについての鋭敏さである。平凡な中から、唯だ一つ何かを捉へて、生々とそれを一首の裡に生かしてゐる。描寫や叙景に於て、いかにも印象の鮮かな、一首が直ちに繪になり、短篇小説になるやうなのが澤山ある。尙ほ、たいしていゝ歌とは言はれぬまでも味のある物の言ひぶりのしてあることもその一であらう。これらは前にあげた歌のなかからも悠々として引例することが出來るであらうが、更に次に夫等の一端を引いて見よう。

大いなる彼の身體が、憎くかりき、その前に

ゆきて物をいふ時

こつ〳〵と空地（あきち）に石をきざむ音、耳につき來ぬ、家に入るまで

田舍めく旅の姿を、三日ばかり都にさらし、かへる友かな

今は亡き姉の戀人のおとうとと、なかよくせしを、かなしと思ふ

そのかみの愛讀の書よ、大方は、今は流行らずなりにけるかな

蘇峯の書を我に薦めし友早く、校を退きぬ、まづしさのため

師も友も知らで責めにき、謎に似る、わが學業のおこたりの因（もと）

教室の窓より遁げて、たゞ一人、かの城址（しろあと）に寢に行きしかな



かなしみといはばいふべき、物の味、われの舐めしはあまりに早かり

人ごみの中をわけ來る、わが友の、むかしながらの太き杖かな

わが妻のむかしの願ひ、音樂のことにかかりき、今はうたはず

ふと思ふ、ふるさとにゐて日ごと聽きし雀の鳴くを、三年きかざり

三日前に山の繪見しが、今朝になりて、にはかにこひしふるさとの山

田も畑も賣りて酒のみ、ほろびゆくふるさとびとに、心寄する日

ふるさとを出で來し子等の、相會ひて、よろこぶにまさる悲しみはなし

ふるさとの、村醫の妻のつつましき櫛卷など

も、なつかしきかな
年ごとに肺病やみの殖えてゆく、村に迎へし、
若き醫者かな
その名さへ忘られし頃、飄然とふるさとに來
て、咳せし男
意地悪の大工の子なども、かなしかり、戰に出
でしが、生きてかへらず
閑古鳥、鳴く日となれば起るてふ、友のやま
ひのいかになりけむ
わがために、なやめる魂をしづめよと、讃美
歌うたふ人ありしかな
わが村に、初めてイエスクリストの道を說き
たる、若き女かな
ふるさとに入りて先づ心傷むかな、道廣くな
り、橋も新らし



見も知らぬ女教師が、そのかみの、わが學舍
の窓に立てるかな
三度ほど、汽車の窓よりながめたる町の名な
ども、したしかりけり
わがあとを追ひ來て、知れる人もなき、邊土
に住みし母と妻かな
船に醉ひてやさしくなれる、いもうとの眼見
ゆ、津輕の海をおもへば
おそらくは生涯妻をむかへじと、わらひし友
よ、今もめとらず
あはれかの、眼鏡のふちをさびしげに光らせ
てゐし、女教師よ
演習のひまにわざ〱、汽車に乘りて、訪ひ
來し友とのめる酒かな
若くして、數人の父となりし友、子なきがご

とく酔へばうたひき

雨に濡れし夜汽車の窓に、うつりたる、山あ
ひの町のともしびの色

アカシヤの街樾（なみき）にポプラに、秋のかぜ、吹く
がかなしと日記に殘れり

かの年のかの新聞の、初雪の記事を書きしは、
我なりしかな

わが妻に着物縫はせし友ありし、冬早く來る、
殖民地かな

平手もて、吹雪にぬれし顏を拭く、友共產を
主義とせりけり

酒のめば鬼の如くに青かりし、大いなる顏よ、
かなしき顏よ

あをじろき頰に淚を走らせて、死をば語りき、
若き商人



子を負ひて、雪の吹き入る停車場に、われ見
送りし妻の眉かな

敵として憎みし友と、やや長く手をば握りき、
別れといふに

みぞれ降る、石狩の野の汽車に讀みし、ツル
ゲエネフの物語かな

忘れ來し煙草を思ふ、ゆけどゆけど、山なほ
遠き雪の野の汽車

うす紅く雪に流れて、入日影、曠野の汽車の
窓を照せり

腹すこし痛みいでしを、しのびつつ、長路の
汽車にのむ煙草かな

乘合の砲兵士官の、劍の鞘、がちやりと鳴る
に思ひやぶれき

空知川雪に埋れて、鳥も見えず、岸邊の林に

ひと一人ゐき

うたふごと驛の名呼びし、柔和なる、若き驛
夫の眼をも忘れず

出しぬけの女のわらひ、身に沁みき、厨に酒
の凍る眞夜中

わが醉ひに心いためて、うたはざる女ありし
が、いかになれるや

死にたくはないかと云へば、これ見よと、咽
喉の痍を見せし女かな

波もなき二月の灣に、白塗の、外國船が低く
浮べり

三味線の絃の切れしを、火事のごと騷ぐ子あ
りき、大雪の夜に

函館のかの燒跡を去りし夜の、こころ殘りを
今も殘しつ



君に似し姿を街に見る時の、こころ躍りを、
あはれと思へ

いそがしき生活（くらし）のなかの、時折のこの物おも
ひ、誰のためぞも

しみ〴〵と、物うち語る友もあれ、君のこと
など語り出でなむ

ひや〴〵と、夜は藥の香のにほふ、醫者が住
みたるあとの家かな

君來るといふに夙く起き、白シャツの、袖の
よごれを氣にする日かな

まだなか〳〵あるが、この位ゐにしておかう。いづれもみな、こゝちよい輕快な印象や感傷を與ふる歌ではないか。土岐哀果君の歌が石川君のに似てゐるとよく言はれたのも、この一面の詠みぶりに於て相通じた所があつたのだと思ふ。このごろは一般によくこの調子を眞似るやうである。一寸素人ずきのする、やり易い型だからであらうが、やりそこなふと實に薄つぺらなものになる。

以上で、不充分ながらも私の見た石川君の歌の特色をほゞ紹介し得たつもりだ。いろ〳〵もつと述べることが多いやうに考へてゐたが、ちよつと筆に上らぬ。また、くだらぬ説明を附けるよりたゞ茲に引いたゞけの彼の作を見ることによつて彼の一般を推して貰ふ方が却つて正しいかとも思ふ。私として、彼並びにその歌に對して多少の異見がないではない。然し、それを述べるべく私の心の準備がまだ整つてゐない。故に以上に留めておく。——以下略す——



## 我が見たる最近歌壇

心を惹くものもないので久しく他の雜誌の歌を讀まなかつたが社友某々君等の依賴もあり、自分にもまた妙に讀んで見たくなつたので、手許にある十冊ほどの前月（註、大正三年八月）發行のものをずんずんと讀んでみた。これはその折のおぼえ書である。同感の人もあるかと思ひ、次に御紹介する。

○現代詩文

由來この雜誌に據つてゐる人たちの歌は抽象的概念的のものが多く、總體にガサ〳〵してゐる樣である。今號のでは中村秋津、篠田天水の兩君のをよいと思ふ。中村君のは思つてゐる事がまだ充分に形をなしてゐず、篠田君のは心の表面が既にわるく凝固してはゐないだらうかと思はせられる。全體には前者よく、一首々々には後者がよい。

垂乳根の母（篠田天水）

西窓に夕陽は射し來れ病む母の寢がほさびし

くほの赤み居り
氷嚢をかへばやと探る胸の上にあはれ二つの
乳房も垂りぬ

明暗の生命（中村秋津）

照れば倦みかげればひたにやすからず心危し
夏の熱き日
耐へかねし脱走人のごとくにも旅に出でゆく
心小さけれ

○青　鞜

まよひ（三ケ島葭）
眞實の光（岩淵百合）
暗中より（齋賀　琴）

凡そ女流作家は或る程度に達するや否や忽ち或る一定の型に納まつてしまふこと寧ろ不思議な位ゐである。この三氏も急いでいま其處に到着して居られる樣である。言葉でのみものを言つて居る風な



戀の歌ほど飽氣ないものはない。岩淵氏のがや、なま〳〵しいが、この人はまだ其處に到着し得ぬ程度に於て幼稚である。

その後は君とわかれしさびしさをおぼゆるほ
どに心なごまず（よし）
さまよはんさまよへるまは暗き身の明日も忘
れん今日も忘れん
たゞひとり尊きいのちいだきしめいたはりあ
れば輝く太陽（ゆり）
尊きはわが眞實にはぐくまれし只ひとすぢの
さびしき生命
こしかたのたのしかりしもうかりしもああ何
事も君にかかはる（こと）
こまやかに君とありける朝夕の忘れがたきぞ
未練といふや

○生活と藝術

軟風に向ひて（大熊信行）

同君のは「創造」にも出てゐるが、それは徒らに元氣のよいもののみであつた。こちらのにはややおちついた所が見え、讀むにもおちついて讀まれた。

あまたたび會ひゐたるごとく思ふかな
その妹を
いまだ知らずも。

手にとれば
夏着のしまのふくらめる
ちぶさも見えし寫眞なりしかな。

○詩 歌

向日葵畠（前田夕暮）

安ペンキで塗りたてた樣ななかにとき〴〵眼に立つのが混つてゐる。

夏の日の向日葵畠しんとして物おそろしき向日葵畠

向日葵畠ひたなきめぐりなきめぐる我が白豚の尾が日に光る

我が部屋の椅子の上にて椰子の實が青く芽をふく夜のたのしさよ

日暮れ近きに（田中白夜）

ほの〴〵と暗きそらよりふる雨の妙に光れば鷄が鳴く

裏庭のかぐろき土に日がさせば遠野にあひる鳴きいでにけり

旱魃（村田光烈）

旱魃ぞと路ゆく人の云へるにも悲しくなりて田に走りたり

何んにも云はず路の邊にしろく乾きたる馬の嚢をじつと見てありにけり

教員卑下の歌（都會詩人）

心より語らず君も心よりわれも語らず病めるに向ふ

青　菜（小野みゆき）

いもと背のちぎり悲しも窓のべのさくらましろに搖ぐなりけり

くりやより見ゆるはつかの空の青人妻なれば戀ふばかりにて

夏木の實（佐々木順）

母とともに病む弟を見舞ひけり七面鳥を飼へる醫院に

別　離（川端千枝）

かなしさにうなだれゆけば草にゐて草食む蟲の青きを見たり

瓜のはなさくときけどもさみしさにふたりはものをいふとせざりき



この雜誌は著しく傾向も歩調も一致してゐて、誰と取立てゝいふべき作も無かつた。

○我　等

秘事二三（吉井　勇）

例のお芝居がかりの戀歌である。作例二三。

別れよの遠くござりた君ゆゑに未練の涙しとど落ちぬれ

かにかくに懸けてたもるな薄なさけ身さへ細ると歎きしや誰

あぢきなう別れし後の身となれば立つ浮名さへ悲しきものを

相　思（小島鈴枝）

あまりにも君を戀しと思ふときわれにいささか憎しみをもつ

火もていまとりかこまるる身とわれをたとへつつなほ夢を見るかな

市にまじりて（三ケ島葭子）

しばらくは嵐の中のゆゆしかる鳥とおもひぬけふのおのれを

わが知らぬ思ひに耽る君を見てただある我となりにけるかな

とにかくと言ふもの丶、今の女流中では矢張りこの人などを一番たのもしく思ふ。

涕　泣（原田琴子）

いつ見ても殆んど比喩か概念で出來てゐて、薄く固まり、何の生氣もない、よく倦まないものだ。

わが前におかれしもののわがものにあらざるはよしそこなはぬため

戀ざめのかなしきころとかこちけり知らぬ罪をば負はされしごと

山上より（原阿佐緒）



心やや吾にかへると思ふときはや悲しみにむしばまれ居り

本意とげし心ゆるみのおとろへか君がかたへにかくも病めるは

潮の香（知貝彥太）

久しぶりで見て心がときめいたが、讀んで了つて失望した。以前の君の歌に見た熱も光もないと思ふが、如何であらう。

放　浪（萬造寺齊）

あまり大ざつぱで何かの演説でもきいてゐる樣なところがある。一篇を通じて表はさう表はれようとする潜勢力を感じないではないが、それにしては何だか中途半端だ。

いつかまた光に會はむ我が汽車はもの狂ほしく暗より暗へ

汽車は我が死骸の上をはしるにはあらざるか息苦しあゝ息苦し

寂しさに狂はむとする我を乘せはしれば汽車

も狂はむとすや

○アララギ

臨海小景、山中秋景（北原白秋）

兩の掌に輝りてこぼるる魚のかず掬へども掬

へどもまた輝りこぼるる

落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬をい

ま離れたり

木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中に

あつまるあはれ

山峽に橋をかけむと輝くは行基菩薩か金色光

に

帆をかけて心ぼそげにゆく舟の一路かなしも

麗かなれば

此處まで讀んで來て漸く歌といふものに出會つた樣な胸のときめきを感じた。何といふ麗かな、何といふ鋭い、何といふ哀しい歌であらう。私は斯ういふのを、時に發する人間の光だと思ふ。底の底に沈んで居る何ものにもかへがたい人間のみの感ずる尊い悲哀だと思ふ。それがいま實にあらはにいきいきと一首々々の上にうたはれて居る。發せむとして卽ち發する、何のくもりもおびぬこのこころこそまさしく歌のすがたであると思ふ。眼にも見えず、手にもとりがたい深い〳〵歌の姿を、私はいま是等數首の上に見る。

鍼の如く（長塚　節）



北原君のを讀んで、こちらに移ると一寸心の調節が合せにくいのを感じた。彼は全的に燃えてゐるし、之は部分的に燃えてゐる。おなじ人間の感傷でも前者は或る特種の人か、或は或る場合に稀にのみ感ずるものであり後者は多くの人が、行住座臥殆んど差別なく感じてゐて而かもこれだけによう歌はぬ事柄であるのだ。而して斯の身近の四邊の景象をじつと靜かに眺めてゐる後者の姿にもまた言ひ難いなつかしさを覺えずにはゐられない。要するにその時のその人の心に透徹した眞實性のこもれるが故であらうと思ふ。

ちまたには蚤とり粉など賣りありく淺夜をは

やく蚊帳吊らせけり

月見草萎まぬ程と蛙鳴く聲をたづねて松の木

の間を
ころぶしてみれば梢は遙かなり松かさか動く
その雀等は
硝子戸を透して蜩に月さしぬあはれといひて
起きて見にけり
かかるときゆふがほ畑に立ちなばとおもひて
も見つ今は外に出でず

凪の星（中村憲吉）

佳い歌だとは見るが、その場合の心持がそれほど生き〳〵と我等の胸に通はぬのを憾む。

海原にあらし雨やみ明け近くいま凪の星現れ
にけり
電燈の蓋に虫ゐる小夜ふけてしづかに外に雨
ふりいでにけり
ほかにまたあるひは男近づきて日まはりの花
めぐりたらむか



曇日の若楓（土屋文明）
一面に曇れる空のいづくよりさして匂へる夕
日なるらむ
かへるでの一葉の上のうす日さへ過ぐるはか
なし寄り來吾妹子

折々の歌（平瀨泣崖）
わが庭の夜空の木立ほのめけり地にははろか
に月出でんとす
くひなが鳴くとあが言へばさりげなくきそも
なきぬといらへたりしか

諦念、折にふれて（齋藤茂吉）

先々號及び先號の同氏のを讀んだ期待を以て今號のに對し、多少の失望を感じた。一首々々はとにかく、全體から受ける力が薄かつた。そして不圖前に見た北原君のと長塚氏のとの作風のどつちつかずの所に同氏の詠みぶりはあるのではないかと思はれた。そのつもりになつて（齋藤氏の作を讀むのだといふ氣で）讀めばどの一首にもみなうなづかれる。然し、いきなり讀みかかつた時には何だか自

分に關係のない特殊のものを見る樣で、殆んど何の感興を惹かぬ歌が多い。感動を以て讀んだ侏儒ひとりやおたまじやくしのうたでも、よく考へてみればどうもその時だけ自分の心を他のものに變へて、或は一部分に制限して、それから感動した形があつた樣である。感覺の銳敏などといふことを考へ合せてみぬでもなかつたが、その感覺もわるく固くなつた、また偏つたものである樣に思はれて、いや應なしにこちらに傳はるといふ大きな强い所がなかつた。「赤光」をも、うまいなアとは思つて讀んだが、それはそれを讀む時ぎりの感じで、久しく心に殘つてゐるそれではなかつた。どうしてさうなのか自分ながらよく理解が出來かねて、不思議に思つて居る。

たいぼくの椽のあたまは風のなか嫩葉たふとく諸向きにけり

流れ風この朝ながれ椽の樹の嫩葉ひつたりと向かせけるかも

晝さがりひでり幽かに來はてつる此處に軍鷄群れかがやきにけり

火、（島木赤彥）

此處でもまた中村氏に言ひ齋藤氏に言つた不滿を感ぜずにはゐられなかつた。失禮な言葉であるが下手な彫刻師の手になつたものを見る樣に、歌に少しも動きを感じない。操つたい樣にも思ひまた自分の感じが餘りに凡俗平板で斯ういふ境地を覗ひ得ないのかと心細くもある。諸氏等相互の批評などを見てゐると特にそんな氣がする。

火の上に投げかさねたる草くづれ烟黃いろく渦まき光る

草深く燃あがりたる火の炎黑ぐろとして噴きにけるかな

以上で筆を擱くことにする。ずんずんと走り讀みの、甚だ大ざつぱな紹介ではあるが、大方の模樣は察せられること丶思ふ。思ひ違ひなどの無いとも限らず、いづれまた改めてこの稿を草したいと思つてゐる。

斯う纏めて讀んで、昨今の歌壇のいかに平板單調、生色の無いものであるかに今更ながら驚いた。その中にあつて「アララギ」の人たちの一心な態度を少なからず尊く思はずには居られなかつた。我等も唯だ月々の雜誌での發表を旨とせず、專念自分の赴く所に深く思をひそめて行きたいものではないか。



265191

# 『土岐哀果集』の印象

土岐君の歌には、これは不思議ともいへば言へる位ゐだが、底に一向不滿を持たぬ。不平を持たぬ。（使用せられてゐる文字に從へば、かなり豐富に不滿や不平が述べてあるのだが。）それかと云つて、すつかり悟り切つた人の持つ冴えも寂びも無い。

一首々々讀んで行く時には、いろ〳〵な物や出來事がはつきりと眼に見えて來て、興味を感ずるが、讀んでしまへばそれだけである。電氣館を出た後の心持である。

巧みな水晶細工に於ける如き巧緻と、鮮明とを彼の作は持つ。痒いところに手の屆く快感を覺えがちである。ひやり、ひやりとする樣な手法を用ゐて、常にそれを生かしてゐる。

子猫の眼のやうな敏捷を以て常に彼は彼の作の題材を捉へて來る。彼の身邊のあらゆるものが悉く



彼の短い詩のうちに捉へられて來て、そして小氣味よくその中で動いてゐる。

次第に複雜に刹那的に、且つ物質的に各自の生活がなり行かうとしてゐる時代に於て、どうしても土岐君の如き傾向を持つた詩人が出なければならぬと思ふ。さういふ意味に於て、自分は心から同君の近來の沈默を惜しみもし、不思議にも思つてゐる。たゞ、これはお互ひだが、まだ同君も要するに物の形しか見てゐないやうだ。それにもう一つ自分のやうな田舍者の慊く思ふことは、何と言つて威張つても同君の作には惡い意味の江戸つ子式藝術の弊が見えてならぬ。おでんが燒林檎に變らうとも、食ふ態度に變りはない。

# 『和歌合評』より

草しきて身は休らひつしみぐ〵と聞きの親し
き松風の音

休らひつのつは間違つてつかつてゐるのだらう。第一身はも不用、どころでないわざ〳〵斯う小きざみに斷（ことわ）つたゝめに非常に力を失くしてゐる。つゝの意味なら休らひをればで澤山だ。尙ほ、聞きの親しきもいやだ。此頃流行の一つとなつてゐる樣だが、聞きの親しいの見のよろしいのと、僕にはいかにもわざとらしく聞える。親しく聞ゆるといふ生きた感じは出ずに、多くの場合如何にも乾いた言葉だけのものとして現れてゐる。一體これらの使用者はそれほど智的に、上品にものを言はねばならぬだけの必然性を以て言つてゐるのか如何か。なぜもつと率直（そつちよく）に云へないものか。松風の音も生硬である。要するに言葉を無機物扱ひにした弊が露骨に出てゐる一首である。

けならべて不樂しき身にも向山の櫻若葉はす
がしくし見ゆ

向山は元來むかひやまだらう、それを普通むかうやまとかむかつやまとかよく轉じて使つてゐる。だから僕は初めからそのつもりで讀んでゐた。つまり向つ山とか向う山とか假名を入れるべきであつたのだらう。これは或は清書の時の誤であつたかも知れない。總評は「沐猴（もくこう）に冠（かんむり）するもの」で盡きると思ふ。口か頭かだけ前に突き出してものを云つてるのを感ずるのみで、腹はぺしやんこだ。

穗孕める麥の畑に白々と初夏の風ゆき流るか
も

割に此歌は好きな方だが、言葉は矢張り消化れてゐない。然し、聞きの親しきやけならべてさぶしきよりも正直でいゝ。ゆき流るはこの人に似合はぬお上品な言葉だが、これは一寸困つて拜借した形かも知れない。ホハラメルは厄介だが、穗を孕んだ麥と特に斷つてあるのはいゝ。この場合なくてはならぬことゝ思ふ。菊池君の、初夏の風を概念だとは酷（ひ）どすぎるが、初夏とわざ〳〵言ふ必要はまつたく無い。斯んな贅語を使ふ代りに、穗孕めるの樣な窮屈な、また行き流るの樣なだれた句を訂正する勞苦を執つて貰ひ度かつた。かと言つて穗を孕むはいけない、それではだれて了ふ。どうしても一首全體から詠み直す必要がある樣だ。

　からたちの見れば淋しきその花を久々ぶりに
　友が家に見つ

からたちの、見ればさびしきその花を、のあたり一寸した味を利かせた風が見えるが、利かせるために利かせたのではない自然なおちつきが出てゐて無意識の裡に成功してゐる。歌は理屈で作らないと同じく、理屈では解釋出來ぬ微妙な變則な力を持つものである。僕はこの間延びのした兩三句によつてその花の前に佇んだ作者のぼんやりとした、然しながらその中から細く鋭く動いて出て來る感動を感じた。その花とこの花との論には全然不贊成だ。その花でこそ歌が大きく且つ面白くなつてゐる。このにすれば小さくくしやんでしまふ。それこそ一種の概念化だ。見つも原作に贊成する。つとぶきりと切つた所に言ひ難い重みと鋭さがある。全體から見て手法として珍しく成功したものであると思ふ。

　里がへりする新妻の髪かたち母がなほすもゆ
　かし春の日

困りましたネ、非難をすれば妬くと言はれる――が、全たく甘い。それも五體を絞り上げた甘さで



はなく、所謂舌つたるい種類である。大いに惚れる可く、大いにのろくべしであるが、天然自然に滲み出たのろけではなくして、これ見てくれの大向ふを相手にした惚氣はどうもいけない。ことに、母が直すもゆかし春の日のあたり、丁寧すぎることである。

　なきながら落ち來し雀さにはべの椿にとまり
　葉をゆるがせり

氣の無い歌だ。和田君の評と全然同感。作者はこの歌を作りながら一體何を感じたか。恐らく何も感じはせまい。たゞ食後の齒でもつゝきながらペン先でちよい〳〵と寫生(?)したゞけのことだつたらう。正直なものだ、歌がその通りに出てゐる。

　ねむごろにうべなうてくれ疲れつゝしゞに欲
　しかる此酒ばかり

一誦微笑禁じ難き作であるが、少し輕い。輕きを旨として作られたものかも知れないがそれとすればチト重い。ねむごろにうべなうて呉れ、といふも、つかれつゝしゞにほしかるといふも、共にかなりねち〳〵してゐて齒ぎれがよくない、東京者に混つた田舍の人が懸命に苦勞してお洒落を言つてゐ

る形だ。若しこの作者に、い丶氣持になつて見えを切りながらものを言ふ態度が出て來たとすれば遺憾な事だ。人おの〳〵行くべき道を持つてゐる。わき目をしてほしくないものである。

遠の空に飛べる小鳥の身をかはす影は細くも
太くも見ゆる

なぜをちの空としたのだらう、とほ空では聞えぬのか。細くも太くも見ゆるといふのもくだらぬことだ。一寸した面白味はあるかも知れないが、要するにそれだけだ。由來この作者にはたゞ眼前だけの面白味で作られた樣なのが多かつた。一寸變つた景色とか、此奴アものになるといふ風なところを見つけては大喜びで歌にしてゐる風があつた。そして手法が自由になるにつれてそれが增して來る樣に見えぬでもない。危險な話である。眼や指や頭だけで作つてゐては駄目だ、どうしても腹に力がなくてはあつて甲斐なき勞作となり了る。尙ほ、とべる、かはすも少しうるさいと思ふ。とほ空の深きに小鳥身をかはす、とでもすれば引き締まるだけは引きしまるだらう。

明日こゆる山の姿を仰ぎつつ田の畔にわがす
る尿かも

イヤな歌だ。小便をするとか何とかいふ特殊な狀態を面白づくにひとの前にさらし出したにすぎない一首である。描かれた背景に於ける旅の心持など少しも現れてゐない。矢張り眞實が無いからである。それにしても何といふ間のぬけたもの丶云ひ方だ、山のすがたを仰ぎつつ（チヨン、と一つ入れたいネ）タノ、クロニ、ワガ、スル、イバリ、カモ、……それ〳〵氣をつけないと濡れますよ。

ぬば玉の雨夜しづけき螢火の鴨居に居ると知
りて久しも



靜かな歌だ。よく整ひ、相當のまる味を持つた、いはゆる渾然たる作と言ひ度いところだが、其處までは行つてゐぬ樣である。ほたる火も氣になる、唯だ螢であつてほしかつた。知りて久しもにも同じ樣な乾いた感じを誘ふ素因がありはせぬか。雨夜靜けき螢火もよく使はれた樣で實は落ちついてない、寧ろ雨夜の鴨居にと云つた方が眞實の落ちつきを持つ事になるであらう。が、作者の苦心をばよく諒とする。謂はゞそれが過ぎた形かも知れぬ。また、斯う客觀的に歌ふならばいつそもう少し苦心して言葉や調べの上に今少し渾然たる所を示してほしかつた。

戸をひらけば梅のしげり葉ほのぐらき夜あけ
　の庭にひそまれる見ゆ

あつさりして氣持のいゝ歌だ。がらの大きな癖に締まるところはよく締つてゐる樣だ。が、戸をひらけばは少々卒直すぎはせぬか。むつかしい所だが、同じことでも戸ひらけばの方がいくらかいゝかも知れぬ。戸をのをの字が何だか大變說明臭く聞えて氣になる。

植ゑし花いづれ淋しき秋草の中にも萩ははや
　花に出づ

きれいな歌だ。植ゑし花は不消化である。この場合（註、人に寄する歌なれば）植ゑませしなどあるべきだと思ふ。はや花に出づもさうである。はや咲きにけり、の方が野暮ではあるが穩當であらう。婦人雜誌の口繪を思はせないでもないが、さう惡い氣持のせぬ一首である。

庭草の露の光りに見あぐれば今はさやけき月
　ありにけり

これは月蝕の夜、かけてゐた月がいつの間にか照り出した場合を詠んだものだ。だから事情から推



して全然芝居歌として見るわけにも行くまいが、どうも芝居臭い。それはこの一首が理智の作、常識の作だからであらうと思ふ。歌に、さうした場合の作者の心の働きといふものが少しも傳はつてゐない。溫みが無い。

靜かなる海の上かも我が船の日の大丸の旗ひ
　るがへる

海上に船が停つてゐるといふ非常事を想像するのが先づ無理だ（註、前評者の後を受けて）。成程海の上かもの上かもが間延びのしてゐるらしいのは眼につくが、さう小きざみにせんさくするを用ゐぬ程度にこの歌には間の拔けた長閑さがある。海のまん中に居る氣持がよく出て居る。日の大丸もこれでいい。

しみぐ〵と心の空虛身にぞしむ木蔭に鳩のな
　きかふきけば

こころが少しも言葉に乘つてゐない。一種の說明となつて居る。この上の句の樣に大づかみな言葉が口に出ようとする時は、よく〳〵心してそれを抑ふべきである。

眞晝日を籠居すればとゞろかに土用波の音迫
りて來るも

土用波の歌なのだから土用波について云々するのは無意味である。歌は甚だ拙い。眞晝日を籠居すれば、など間の抜けたこと夥しい。土用波の音迫りて來るも、この調子で見るとこの土用波は勝手で使ふ水の音に似てゐる。

赤き灯を水に流しつ油なす闇の港を行く船の
あり

赤き灯を水に流しつ、油なす、闇の港を、行く、船の、あり、何といふかぼそい調子だ。消えて失くなれ！

へだたりて胡桃と檞と古里の山に大きくそだ
ちゐにけり

胡桃の木と檞の木の勘定をし始めた人たちよ、一體その木には葉が何枚ありました。大きくがいけない。此のナマな言葉が無かつたら、もつと好きな歌になる所であつたに。



今宵吹く風の冷たさ身にしみて端居のわれの
戸を閉ざすかも

上の句の「今宵吹く風の冷たさ身にしみて」はよく落ちついてゐる癖に何となく氣のない言ひかたである。下の句は例の詩的動作（お芝居とは言はずに置かう）の披露である。「端居のわれの戸をとざすかも」……甚だいゝ氣持らしいがそのため歌もほんの形ばかりの、氣障なものになつてしまつた。これまで讀んで來ると上の句の力の無かつた理由がよく解る、即ち風の冷たさなどはどうでもよかつたのだ。戸を閉す作者の姿を想見さすことが一首の目的であつた。

校門のかたへの園に百合の花あはれに小さく
咲きいでにけり

あはれな歌だ。よき意味にもあしき意味にも。前のと違つてあて氣のないものではあるが、要するにそれだけで、力のない小さな歌である。

空蟬の身を清めむと岩ばしる雪げの水にひた

りけるかも

この一首には一寸註が必要であつたのだ。作者が何とか講中の一人として鳥海山だかに登つた時、その山の頂近くでその登山者の儀式の一つとして水を浴みた、その時の作であるらしい。これは選者たる私には解るが、幾首か連作の中の僅か四五首を斯う拔いて來たのでは他には一寸解りかぬるかも知れない。が、同君前月號の作はみなそれに連つた作ばかりだから大抵は察しのつきさうなものである。それにしては山・野雨君の評は少々やかまし過ぎると思ふ。何もさうたいした事のある作ではない。私には一浴び浴びながら一種の輕い興味から微笑んでゐる作者の心が見えるばかりである。またそれだけでこの一首の使命は果されてゐると思ふ。好きな歌である。

ひた〳〵に潮さし來り河岸の家の朝のなりは
ひしづかなるかも

確かさの無いのは事實。想像はつくが、歌から受取る感じが誠に微溫的である。しづかなるかも、と感嘆を急いだのがこの缺點を招いた第一因であらうし、また第三句の河岸の家のもつぎ穗がわるい、落ちついてゐない。朝のなりはひも亦た然りである。いゝ境地を捉へてゐて惜しいことをしたものだ。今少し徹底的にそのみち潮の河岸を寫生したらよかつたらうに。



やうやくに大樹の梢に照りそめし朝の光のあ
はれなるかも

これも微溫的である。これは矢張り「漸くに大樹の梢に照りそめし朝の光」で突き放してしまふ方がよかつたのだ。其處へ不確かな詠嘆などを持ち込んで來たゝめすつかり光が薄れてしまつた。「朝の光のあはれなるかも」といふ風の煮え切らない、ぬるま湯式の詠嘆は誠に不氣味でいけない。

赤とんぼ秋の入日にむらがれり澄みて連なる
低き山なみ

安つぽい石版畵を見るやうである。言葉に血がない。一首に呼吸がない。一首に徹る呼吸、一首を貫く調子の無いといふことはその一首を作る時作者の心に呼吸がなく、調子が無かつたためである。またそれは觀照が徹してゐなかつたことを示す。見たまゝをフイ〳〵と言葉にのぼせた事を語る。大きないゝ場面を捉へてゐながらこの一首の何といふ貧弱な、矮小な姿を洒してゐることか。今少し腹を据ゑて作らるゝ事を勸める。

# 自歌自釋

## その一（大正七年）

### 秋の歌

筏師の焚きすてていにしうす霜の川原のけぶりむらさきに立つ

以下すべて武藏秩父の溪間にて詠める歌。

朝であつた、川原のまろらかな小石には微かにみな霜が降りてゐた。ふと見るとその川原に焚きさしの火があつて、自然に燃え盡きてゆかうとするころの薄紫の煙がかすかに風のない朝空へ立ち昇つてゐる。

其處を詠んだものだが、少し詠みぶりが概括的である樣だ。そのためその景色だけはいかにもきれ



いらしく眼にうつるが、その煙の立ち上つてゐる生きた感じはこの歌に拔けてゐるやうに思ふ。

石越ゆる水のまろみをながめつつこころかなしも秋の溪間に

清らかな水が澄み切つて流れてゐる。そのながれの中に一つの石があつた。その石は水のなかに浸つてゐて、おもてには露れてゐない。その石の上を越ゆる時水はやゝまろみを帶びたうねりを作つて音もなく靜かに流れてゆく。一つのまろみは一つのまろみを追うてつぎ〳〵と流れてゆく。そのまろみを帶びたあたり、水はいよ〳〵清く、いよ〳〵軟かに、そしていよ〳〵冷たげに見えてゐた。

はだら黃の木の間に見えて音もなくながるる此處の淀深からし

よく見ればなめらかな光を帶びて流れて居る、流るるともなきその淀を薄黃葉した木立隱れに見出でた時何か知らハツとするやうな嚴かな氣になつたのであつた。

水痩せし秋の川原の片すみにしづかにめぐる

水車かな

歌もまた痩せてゐる。ペン描きの小品畫を見るやうな小ぢんまりした歌である。作者自身、オヤオヤと思つたが、作つてしまつては消されもしなかつた。

うらら日のひなたの岩に片よりてながるる淵
に魚あそぶ見ゆ

骨ばつた岩の面には日がほがらかに射してゐた。水にも青みを投げて射して居る。溪は其處に來ると急に狹くなつてひた〳〵と岩により添ふやうにして流れてゐた。それだけ深くもなつて居る。斯ういふ所には必ず魚の多いものだがと窺くともなく窺き込むと果してその岩の蔭に無數の魚が泳いでゐた。水の底までも射し込んだ日光はその小さな魚の動くのにすら光と影とを宿してゐた。

うららけき冬野の宮の石段の段ごとに咲くり
んだうの花

石段には新しい落葉が一杯に溜つてゐた。その乾反葉（ひそりは）の蔭からうす紫のこの草花が行儀よく並び出て咲いてゐた。その花のやうな可愛らしい一首だと思ふ。



草枯れて岩あらはれし冬の野の高きに居れば
鵯鳥の啼く

其處は草山の頂きで、まろやかな平地となつてゐた。そして草もしげからず、土も露（あらは）れ、岩も處々と露れて日に乾いた白い苔などが生えてゐた。黃葉しはてた深い灌木林をおし分けて其處まで登つて來ると急に四邊の開けたのが眼について、思ひなしか汗ばんだ五體に觸るゝ風も寒い。しいんとした氣になつて佇んでゐると、けたゝましく啼き立つる鵯の聲が烈しく耳に響いて來た。聞くともなく耳を傾けて居ると、次第にその聲が可懷しく、あたりの草木も遠くの山々も段々自分より遠ざかつて行くのを感じた。歌も私の好きな一首である。

飮む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の
夕餉なりけり

宿屋とは名ばかりの百姓家の奧座敷に蓄音機の音譜賣の若者と合宿（あひやど）をして忙しい釣ランプの下に夕餉を濟ませた。お茶とてもない、大きな藥鑵に素湯を入れて持つて來た。その湯を詠んだものである。

晴れよとし祈れど西の山々に立つ雲見れば雨
もよしと思ふ

それだけの歌。並び立つ山から山に夕かたまけて雲がしら〳〵と降りて來た、その景色を眺めつゝ詠んだものであつた。舌のよく廻らぬやうな歌だが、思ふことを思ふだけ言つてしまふと云つた風の自由さがあるやうで可愛いゝと思ふ。

いかめしき白塗の鐵の橋ゆけば秋溪の水のせ
せらぐ聞ゆ

かなりの坂道を降りてゆくと思ひもかけぬ白塗の鐵橋が木深いなかにかゝつてゐた。意外な思ひをしながらその小さな鐵橋を渡りかけると、その下には淺い流れが遠く續いて、冴え〳〵した水のひゞきがそこらに滿ちてゐた。

片山を伐りそぎし杉の高山は秋日の晴にくき
やかに見ゆ

鋭く聳えた山の片側の杉はきれいに伐り拂はれてゐた。伐られた處だけ明るく日光を受け、その周



圍はこんもりとした杉の木立である。空と山と伐られた跡と茂つた木立と、それらの區劃が實に明瞭（はつきり）してゐるのを歌はうとしたものだつたが、思ふやうに出てゐない。

長雨のあとの秋日をいそがしみひとの來ぬち
ふ溪の奥の溫泉（いでゆ）

靜けさを歌つたものである。宿屋の者の言つた言葉の裡に妙にさうした靜かな心持を感じたので、卽興的にそれを歌はうとしたのであつた。

秋の溪間溫泉（いでゆ）とはいへど斷崖（きりぎし）にしたたる引き
てやがてわかす湯

座談平語のやうな中に、さうした溫泉場のこゝろもちが幾らかでも出て居れば幸である。

かぐはしき町の少女（をとめ）の來てをりてかなしきろ
かも溪の溫泉は

杉の深い溪間の小さな鑛泉場へリウマチを思つてゐる祖父さんについて一人の綺麗な少女が來てる

た。寂びた、色の失せた周圍にこの少女のみはくつきりと浮き出てゐるやうに見えた。ぼんやりしながら湯の匂ひのする疲れた身體を宿屋の古びた窓にもたせてゐる時など、不圖この少女が眼に觸れると、久しく忘れてゐた浮世のかなしみ、人の生のかなしみに、其處となく心の痛むのを感じたものであつた。歌はまた卽興風の輕い一首、かろいまゝにさうした哀愁が出て居れば滿足である。

　夜べの時雨いまはあがると杉むらの山はら這
　　へる朝の霧雲

靜かな眺めであつた。歌がそれに適つてゐてくれゝば難有い。

　夜の雨のあとの淵瀬に魚寄ると霧ふ溪間に釣
　　れる兒等見ゆ

山も溪もみなまだ濡れてゐた。釣つてゐる兒どもたちの着物もまだ濡れてゐるごとくに見えた。

　鶺鴒來てもこそ居れ秋の日の木洩日うつる淵
　　のはたの岩に



淵は路傍にあつたが、その深い藍色の表を木がくれに見出すと、私はつゝましい氣持になつて路から這ひ降りて行つた。動くものは何もない、と思つたその木深い木陰の深淵の尻の方に鶺鴒が一羽、その黄色い長い尾を振つて岩の上を飛んでゐた。

## その二　（大正九年）

### 梅の花の歌

　よもすがら東南風吹きしきし朝凪に家出でて
　　見れば梅咲き靡く

　東南風吹き沖もとゞろと鳴りし一夜に咲き傾
　　きし白梅の花

　わが庭に咲きしばかりかこの朝け出でて歩け
　　ば梅到るところ

相模三浦半島の端に近く、安房に面した海濱に北下浦といふ漁村がある。私は家族と共に其處に二年ほど住つてゐた。これらの歌はその時に詠んだものである。その漁村の眞正面の沖から吹いて來る

颪を土地の者はいなさと呼んでゐる。一月の末であつたと思ふ、一夜、家を搖がすばかりにそのいなさが吹いた。家の四圍に植ゑ込まれた防風林の犇き騷ぐ音に混つて吼ゆる樣な沖のうなりが終夜聞えてゐた。机の上に下つてゐる釣洋燈が斷えず搖れて、讀書すら出來ない樣な夜であつた。さうして吹くだけ吹いて、朝がたになるとぴたりと凪いだ。

起きて見ると麗かな日和である。ほか〳〵と照る日は寧ろ眩しい程で木の葉の吹き散らされた砂地の庭には濃い陽炎までも立ち昇つてゐる。そして、何の氣もなく眺めて私は驚いた、昨日までは眼にもつかなかつた軒先の老梅の木が眼も覺むるばかりに鮮かに咲いてゐるのだ。驚きながら裏庭の梅、田圃のはづれにある梅の木と記憶を辿つて見て歩けば何れもみなくつきりとこの麗かな日光の裡に咲き靜まつてゐる。いなさは東南の沖から吹いて來て、潮氣を含んだ生溫かい風ではあるが、それにしても斯う一夜のうちに咲き揃はうとは他國者の私にとつて全く意外であつた。朝食の後、まだ昨夜の名殘の荒浪が白泡立つて寄せ靡いてゐる海岸に出て見ると、其處の藪陰、此處の庭先と、到る所にみなこの幹の黑い木が朝晴の日を受けて咲いてゐた。

青鰯浦ちかく來てとびちがふ朝凪の日の梅の
花さびし



これも同じくその漁村で詠んだ一首。鰯の群が浦近く入り込んで凪いだ入江の其處でも此處でも恣まに飛び交してゐる。それは誠に雨の降る樣にも飛んで居る。その入江の岸に白々と咲いてゐる梅の花の寂しいことよ、といふ意である。

朝な朝な立ち出でて見る白梅の老木の花のさ
かり永きかも

朝ごとに來て見ればいつ褪するものとも無いやうに唯だもう白々と照り輝いてゐる、といふ梅の花の美しさを歌つたものだ。

並み立てる椎の梢に風見えて白梅の花いよよ
白きかも

微風の日、こんもりと茂つた椎の木の梢ををりをり風の過ぎて行くのが見ゆる、その椎の木の蔭の梅の花の何といふ白さぞよ、といふ一首。

梅の花褪する傷みて白雪の降れよと待つに雨

降りにけり

盛りの永い梅の花もやがては褪せてゆかねばならぬ、どうかさうならぬうち、この眞盛の白々としたうへに一度彼の白雪の降り積んだ風情が見たいものだと念つてゐるうちに雪は降らいで何事ぞ雨がしと〳〵降つて來たといふのである。私の歌としては割合に調子の張つた、自分で好きな一首である。

友の僧いまだ若けれしみじみと梅の老木をいたはるあはれ

三浦半島に來福寺といふ寺があつて住持の和田祐憲君とは親しくしてゐた。その寺に甚だ梅が多い。梅見にと招かれて或日其處へ行つた。私を案内してあちこちと梅林の中を歩きながら、わきても老木と見ゆる側に立ち寄つては彼は何彼とその木をいたはつてゐた。それをなつかしく眺めながら詠んだものであつた。

雪もよひ黑雲くづれ夕燒けつ庭の白梅褪せ褪せて咲く

急に雪を催して來た空にはもの〳〵しい黑雲の片端が崩れ立つて、折柄の落日にさながら血にも似た色を漂はせながら夕燒けてゐる。不圖見るとわが家の庭に一本しよんぼりと立つた白梅の花が早や既に時過ぎてうら寂しくもいろ褪せて咲いてゐた、といふのである。何處にか言葉の足らぬ憾がある樣だ。

年ごとに覺え來馴れしさびしさの梅咲くころとなりにけるかな

季節の移り變る時ごとに故のないさびしさを覺ゆる癖が私にあるが、別しても春の立つ頃、一月から二月にかけてそれがひどい。思ひがけなく咲いてゐる梅などを見出でた時、オ、もうこの花の咲く時が來たのか、と見入る寂しさは年毎に深くなつてゆく樣である。

梅の花紙屑めきて枝に見ゆわれのこころの此頃に似て

褪せ褪せてなほ散りやらぬ白梅の花も此頃うとまれなくに



梅は要するに咲き出でた初めの頃、まだ眞盛ともゆかぬうちがいゝ樣だ。一輪二輪、ほろ〳〵と梢

に見ゆるあたりを第一としたい。この花は櫻などと違つてなか〱盛りが永い。色も褪せて、半ばは既う黑みがかつてゐる癖になほ枝を辭することをしない。その姿はいかにも慘めなものだ。紙屑などの枝さきに引懸つてゐるにも似てゐる。それを憫れみ嘲りながら、さういへば何だか自分の此頃もこの花の樣にじめ〱ときたなつぽくなつてゐる樣だとそゞろにわれとわが心を見かへる歌が前の一首である。あとのはそれに續いて出來た一首。きたないとか見苦しいとか云ふものゝ自分の心も何だかこの花の樣に色ざめて、そして汚い執着を何處やらに持つてゐると思ふと一概にこの散り癖のわるい花をも見捨て兼ぬる心地がする、といふのである。倦み疲れた心に自分の生活を見守つてゐる寂しい心を歌はうとしたものであつた。

軒ごとに梅の花咲き乾(から)びたる枯田の里にけふ
は雪降る

日照が續いて田も山も冬枯れ果て、百姓家の軒端軒端には梅の花がほの白く咲いてゐる。それにまア珍しい、けふはちら〱と雪が降り出した、といふ一首。早春の山家を歌つたものである。

枯草の小野のなぞへの春の日にかぎろひて咲
く白梅の花



ゆるやかな傾斜を持つた一つの岡、其處にはなだらかに枯草が靡き伏して居る。春の日はたゞ麗かに其處に照り滿ち、酒の精の樣な陽炎がほくら〱と立ち昇つて居る。その陽炎にほのかと煙らひながら一本の白梅の花が咲き盛つて居るといふのである。これも調子の張つた、好きな一首である。

## 春の歌

春あさき御そらけぶりて午前(ひるまへ)の植物園にひと
多からず

朝日さすかの溫室のガラス戸のすこしあきた
り春淺みかも

木がくれのあを葉がちなる白椿繪かきがひと
り描いてゐるなり

小石川の植物園に遊んで詠んだ歌。

霜どけのした、まだその黑く濡れてゐる土の蔭には草の芽さへもあらはでない頃の植物園、然し、その廣やかな高臺のうへの空にはほんのり、春の光がきざしてゐる。見よ、其處に浮んだ曇り影を、

曇に宿つたほのかな光を。見渡すかぎり草は枯れ、木といふ木はただひつそりと枯木のすがたに立つて居る。歩いてゐる者とても自分のほかには殆んど無い。見れば明るい朝日を浴びた溫室のガラス戸が僅かばかり開いてある。あだかもこの新しいうすら寒い春の光線をよろこび迎ふるさまにも空に向つてつゝましく開いてある。此方にはまた青々として茂つてゐる椿の木の蔭に思ひもかけず一人の畫工がゐて默々と何かを描いてゐる。近づいて見ればその木の花、まだ幾つも咲いてはゐない雪白な椿の花をかいてゐるのであつた。

　麓より風吹き起り椿山椿つらつらかがやき照るも

これは三浦半島の或る椿の多い丘に登つて詠んだものであつた。花の多いのに驚きながら登つて行くと麓から——其處には海が白い浪をあげて居る——汐くさい風が吹き立つて四邊の樹木を吹き靡ける。そのたびごとにあの厚くて固い葉のかげの眞赤な花が日光を受けて濡れた樣にも搖れ輝くといふのである。

　椿山松もまじらひ朝風のこゑのさびしも松葉



散り來る

　風立ちて木の間あかるき散松葉落椿さへをちこちに見ゆ

その山には松の木も混つてゐた。その木に宿る朝の風は自ら我等が耳を澄ましめた。風につれてはら／＼とその枯葉さへ散つて來るのであつた。そして、葉も枝も搖れなびいて明るく見ゆるその風の日の山の地上にはいつぱいに夥しい松葉が散り敷いてその上には其處此處と椿の花も落ち亂れてゐたのであつた。

植物園の歌も、この椿の歌も、詠まれた場所はいいが歌そのものは力の乏しいあまいものであるのを悲しむ。つまりその場の情景にあまりにあまえすぎた形があるのだ。

　わが庭の竹の林の淺けれど降る雨見れば春は來にけり

庭に小さな竹の林がある。林といふほどでもなくたゞ竹が疎らに立つてゐるのだ。其處に雨がしとしと、降つてゐる。それをぼんやりと眺めながら、おゝォ、ほんとにもう春だなア、といふ心持を詠んだものである。

竹の林の淺けれど、の淺けれどをいかにもわざわざ春にかけた樣で厭味にとればとれなくもないが、かけたでなくかけぬでなく、自づからにして斯うなつたその場の心の調子を私は憎からず思つて居る。

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春のはじ
めの雨にあらずや

これも春のはじめの雨の歌だが、前のとは別な場合に詠んだものだ。が、心持はよく似てゐる。二月の十四日に詠んだものであつた事をおもひ出す。

沈丁花いまだは咲かね葉がくれのくれなゐ蕾
匂ひこぼるる

これも早春の歌。まだ花らしく咲きはしないが、葉かげに見ゆるそのうす紅いろの蕾から早や春らしい匂ひが濃く深く流れ出てゐると云ふのだ。それだけ讀者の胸にピンのさきで刺した樣な「春」の或る印象が宿つて呉れれば難有い。

かすみあふ四方のひかりの春の日のはるけき



崎に浪の寄る見ゆ

たゞうららかに霞み渡つた春の日、見ゆるかぎりの涯から涯をばしつとりと深い霞がとざしてゐる。瞼さへはつきりとは開けられぬ樣な重い靜かな春の日のをちかたに一すぢ長い岬が浮んでゐて、その尖端にかすかに白い浪が上つてゐるといふのである。

ひとかたまり菜の花咲けり春の日のひかり隈
なき砂畑のすみに

黑々と棕梠の影させり菜の花のかたまりて咲
く傍の砂に

これは繪で云へばスケッチブックの中にかきとめられた樣な繪である。眼前の景象をただそのまゝに詠んだものだ。陽炎などの立つてゐる砂地の畑の隅にたゞ一かたまり黃い菜の花が咲いてゐる、といふのと、その菜の花の側に黑々と棕梠の木の影が落ちてゐる、とどうも不滿足だが、これさへ直せば佳い歌になると思ふ。

とびとびに岩かあるらし春の日のとろめる入

江浪うごく見ゆ

藍甕のおもての樣に靜かにとろんだ春の入江にところどころ動くともなく浪が動いてゐるといふ一首。

よりあひて眞すぐに立てる青竹の藪のふかみ
に鶯の啼く

小藪ではない大きな竹の並び立つた青竹山の奥の方に折々鶯が啼いてゐる、といふのだ。その鶯の聲がこの一首のうへで小さな淸らかな玉を投ぐる樣にも響いて吳れゝば望は足るのである。

花ぐもり晝は闌けたれ道芝につゆの殘りて飯
坂とほし
たわたわに落つる春田のあまり水道邊につづ
き飯坂とほし
行き行けば菜の花ばたけ蝶々の數もまさりて
飯坂とほし



友ふたりたけぞ高けれだんまりの杖をうちふ
り飯坂とほし
菜ばたけのすゑの低山やますそにそれとは見
ゆれ飯坂とほし

福島縣の瀨上町に或る友を訪ねて一泊し、その翌日友人二人に誘はれて飯坂溫泉まで田畑の間を歩いて行つた。いま一兩日すれば桃も咲かうとし、櫻もほの紅くほころびかけ、道ばたの枯田にはもう水が廻してあつた。その間を宿醉の足どり覺束なく歩みながら、折々聲に出して歌ひ上げた數多の歌の中で記憶に殘つてゐたのが此等の數首であつた。

## 櫻の歌

なにとなき寂しさ覺え山ざくら花ちるかげに
日を仰ぎ見る
行きつくせば浪青やかにうねりゐぬ山ざくら
など咲きそめし町

二首とも私の十八九歲の頃の作である。正直に幼いが、子供のかいた繪を見る樣な面白味が無くも

ない。

前の一首。はら〳〵、はら〳〵と散つて來る山櫻の花蔭に立つて、何とも知れぬ寂しさに襲はれながら仰ぐともなく空を仰ぐ、恰も其處に太陽が輝いてゐたといふのである。

後の一首。これは私の鄕里に近い美々津港での作で、山蔭の小さな港町の春を詠んだものである。

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くらむ
山のすがたよ

父母よ神にも似たるこしかたにおもひであり
や山ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに白う映らむ
山ざくら花

これもまた同じ年頃の作、私は自分の村から十里餘を離れた延岡といふ城下町の中學に出てゐたので、どうした機會でか或る春の夕暮、急に母が戀しくなつた、一心になつて母の事を想うて居るとそぞろにその母の住む鄕里の山の景色が眼に浮んで來たのであつたらう。それが先づ一首となり、それから自づと第二首第三首の歌と延びて行つたものとおもふ。すべて、微笑をそゝる種である。



けふも雨降る蛙よろこびしよぼしよぼに濡れ
て櫻も咲きいでにけり

雨中の櫻である。言葉から調子から甚だ平易に詠みすてゝあるが、さうした中に春のまだ若い頃の氣分が却つてみづ〳〵しく出てゐる樣に思はれて好きな一首である。雨がしと〳〵と降り、蛙がろ〳〵と鳴き、そのなかにうす紅ゐのこの木の花が濡れながら鮮かに咲きそめたといふのだ。

鶸繡眼兒燕山雀啼きしきり櫻はいまだ開かざ
るなり

曇さびしいま七日たたば咲かむとふ櫻木立の
蔭を行き行くに

この二首は或る年の四月中旬、秋田市に在る千秋公園で詠んだものである。千秋公園は舊城を直ちに公園としたもので、小高い丘の樣になつた全體に殆んど櫻のみ植ゑてあつた。しかもみな可なりの老木であつた。私の行つた日は深い曇日で、その櫻の木立には春を樂しむ種々な小鳥がいづれもみな嘈々としてうるさいまでに啼き交してゐた。が、例年ならばもう花の綻ぶ頃であるのにその年の寒氣

のせゐでいま一週間もせねば咲き出でぬといふのであつた。さうした場合の重苦しい樣な、樂しいとも寂しいともつかぬ感じがこの二首を詠ましめたのであつた。

顏の汗ぬぐひながらに九段坂さくら眺めて登る獨りぞ

九段坂を登つてゆくと牛が淵の方から眼上(まうへ)の銅像のあたりにかけ咲き誇つてゐるこの花が見ゆる。急に暖くなつた此頃の季候に顏中に流るゝ汗を押し拭ひながら登つて行くと多勢の花見の人が三々五々と連つて登りつ下りつして居る。そのなかを――その時私は屹度何か面白くもない用事か何かを持つてその坂を登つてゐたに相違ない――自分だけはたゞ一人、連とてもなく登つて行く、やれ〳〵、咲いたわ〳〵といふ一寸自分をも花をも馬鹿にした調子の何處にかこもつてゐる歌の樣である。これに續いて次の一首が出來てゐる。これには坂を登り切つてやゝ落ちつきながら改めて滿目の花を見渡した氣持が出てゐる樣だ。

九段坂息づき登りながめたるさくらの花はいまさかりなり



日なかには人目ゆゆしみおぼろ夜のくだちに妻と來しさくら狩

暫く小石川の金富町に住んでゐた頃ツイ眼の下に江戸川の櫻が咲いてゐるのだが、どうも晝日中夫婦づれして花見と押し出す勇氣がない。きまりがわるいと云へば云ふものゝ、要するに貧しき者の悲哀からである。で、大抵の花見客の歸つてしまつた樣な夜の更にひつそりと二人してあの川端の花を見歩いた事があつた。その時の述懷である。

この一首に續いて次の二首も出來た。

いそいそとよろこぶ妻に從ひて夜半のさくらをけふ見つるかも

おほかたは人の歸りし花見茶屋夜ふかきに來て妻と酒酌めり

花見むといでては來つれながらふる光のなかを行けばさびしき

うらうらと芝生かぎろひわがひとり坐りてを

れば遠き櫻見ゆ

天つ日のひかりさびしも芝生よりふらふらと
われの立ちあがる時

遠見にも咲きこそなびけ醉ひどれてわが行く
かぎり櫻ならぬなき

東京附近は市内にも郊外にも一體に櫻が多い。これは郊外の花を見歩いた時、手帳に書きつけたものである。花を見ようと出ては來たが、この強い日光――ながらふる光といふのはたゞ流るる光の意だが流る、光といふうちには自然弱からぬ日ざしの心がこもつてゐるであらう――の下をとぼ〳〵と歩いてゐると何といふ事なく或る寂寥が身に迫る、といふのである。この第一首の背景には矢張り遠近にその豐かな花の咲いてゐるのが想像せられなくては意味が薄い。第二首から第四首まですべて、その心をもて詠まれてある。東京の郊外を知つてゐる人には面白く感ぜらるるであらう。

けふもまた風か立つらしひんがしに雲茜さし
櫻咲きみてり

けふもまたやがて吹き出すことであらう、どうだあの朝燒の雲の赤いことは、と櫻のさかりの頃きまつて吹き出す風を詠んだものである。いゝ境地を詠んではゐるが、どうも言葉のうへに無理があつてよく落ち着かない。

窓の障子細目に繰れば風ほこり渦巻けるなか
に櫻花見ゆ

前のと同じ境地を歌つてゐるのだが、この方が少しおちついてゐるかも知れない。窓の障子を細目にあけて見ると、風ほこりの渦巻いてゐるなかに揉まれ〳〵て櫻の花が咲いてゐるといふのだ。これも東京のこの季節を知つた人でなくては面白くないかも知れぬ。

いついつと待ちし櫻の咲き出でていまは盛り
か風吹けど散らず

これは同じ風の櫻でも漸う咲き出でてまだみづみづしい頃の花を詠んだものだ。

## 春深く

春眞晝沈み光れる大わだの邊に立つ浪は眞白

なるかな

麗らかな春の眞晝、海はいちめんに油を流して光り沈み、天のひかりのなかにも重々しい憂鬱が輝き籠つてゐる。その海と天との間はるかに遠く連つた海岸には宛ら雪の樣に眞白な浪が靜かに靜かに寄せてゐるといふのである。

うつうつと霞める空に雲のゐてひとところ白
く光りたるかな

これも前のと殆んど同じい心持を歌つたものである。暗いまでに霞みこめた大ぞらの一點に一つの小さな雲が浮び、其處に寂しい光を宿してゐる、といふのだ。

田尻なる雜木が原の山ざくら一もと白く散り
ゐたりけり

水を淺く湛へたまゝまだ鋤かれずにある田の端に續いて雜木の原がある。その小さな雜木林の中に一本の山ざくらが立ち混り、いま白々と四邊に散り敷いて――櫟の枝にも笹の葉にも、または淺い田の畔の水のうへにも――ゐたといふのである。



私はこの一首に對して常に小さいけれど淸らかな、溫雅な心地を覺えしめらるゝ。

庭くらく光り入りたる眞晝の家に菜の花はと
ほく匂ひ來るかも

佳い歌になりさうだが、このまゝでは言葉がまだ消化れてゐないと思ふ。きらきらと光り入つた――さういふ場合、何となく手近の所はうす暗い樣にも思ひ付かるるものだ、で、庭くらくと云つた――なかに遠い所の菜の花の匂がほのかに、さやかに、通つて來る、といふ一首。

棕梠の葉の菜の花の麥のゆれ光り搖れひかり
永きひと日なりけり

うららかな光は棕梠の葉に、菜の花に、麥の穗に、眼前のあらゆるものに宿つて、あるか無きかの風と共に靜かに搖れ輝いてゐる、そのほかには何の事も無い、この永い春の日にといふ一首。

晝深み庭は光りつ吾子（あこ）ひとり眞はだかにして
鷄（とり）追ひ遊ぶ

晝の深くなると共に土も小石も光り輝く樣になつて來た、その庭にわが子がひとり、眞裸體になつて一心に鷄を追ひながら遊んでゐる、といふのである。

燕啼く眞晝大野の日の眞下釣竿かたげ行けば
遠きかな

燕がをり〳〵頭上を啼いて過ぐる、耳に入るものとてはそればかりの、しんと照り沈んだ白晝の野を釣竿を擔いで通つて行く、その寂しさを詠んだものである。

乾きたる庭にたまたま出でて立てば黄き(きいろ)蝶の
まひて來にけり

乾き果てた庭に珍しく出て見ると、恰も小さな黄な蝶々がひとつまつて來た、といふのだ。何でも無い歌だけれど、自分で好きな一首である。

家出て見れば空にはひばり山に蟇(ひき)春が悲しと
ひた鳴きに鳴く



春の更けゆく頃ともすれば身のうちに故知れぬ悲哀が湧く、耐へかねて戸外に出て見ると空には雲雀、山には蟇、とり〴〵に澄んだ聲をあげて鳴いてゐる、といふ場合の氣持を歌つたものである。

とある雲のかたちに夏をおもひいでぬ三月の
海のさびしき紫紺

三月の海がさびしい紫紺色を湛へてゐる、その海のうへに浮んだ一ひらの雲のかたちを眺めてゐるうちに不圖夏らしい心地が身體のうちに動いて來た、といふのだが、これにもまた言葉の足らぬのを感ずる。

這ひあがり岩のかどより海を見るさびしき紫
紺さびしき浪のむ

これも前のに引き續いて出來たものである。季節の言葉は入つてゐないが同じく春の頃のなやみの現れてゐる一首だと思ふ。大きな、險しい、黑々しい岩に這ひ上つて海を見渡す、其處には唯だ紫紺の色に潛んだ海があり、海の面には唯だきびしい浪が群れてゐるのみである、といふのだ。幼い言葉と調子のなかに一種のなつかしさを持つてゐる樣に思ふ。

わびしき濱かな貝がらのくづ砂の屑いざや拾
　はむ海も晴るるに

　これも前のに續いて出來た一首。何とも知れぬさびしさ何とも知れぬなやみに追はれて春深い海岸に出て居る一人の若者を想像して頂けばよい。此等の歌は日向國美々津港附近で詠んだものである。ついでに數首これらの續きを此處に引いて見る。

夕陽に透き浪のそこひに魚の見ゆあるまじき
　こと思ふべからず

默然と岩を見つめておもふことひとに告ぐべ
　き際ならなくに

たらたらと砂ぞくづるるわが踏めば砂ぞ壞る
　る藍色の海の低さよ

ふと浪に向ひてうすく笑ひけりあやふき岩を
　降りはてし時

春の海魚のごとくに舟をやるうら若き舟子は



　唄もうたはず

けむりありて山に野火燃ゆくもり日の光れる
　そらを啼きゆく鴉

ほの／＼とけむり渡つた煙の根がたにかすかに赤い炎も見ゆる、村の人が野を燒いてゐるのだ。空はどんよりと曇つて、惱ましい枯草の煙の匂を漂はせてゐる。その空を一羽の鴉が高くかあ／＼と啼いて行く。

春の日のぬくみ悲しもひたすらに淺瀨に立ち
　て鮎釣り居れば

無心になつて鮎を釣つて居る。まだ冷たい春の淺瀨の水は斷えず清らかなひびきを立て、自分の脛を洗つて流れてゐる。晴れた天からは酒の樣な日光が降りそゝいで、その釣竿を持つた全身を包んで居る。

葉を喰めば馬も醉ふてふ春日野の馬醉木が原

の春過ぎにけり

奈良の春日公園で詠んだものである。彼處には鹿が澤山居る。鹿は好んで木の芽の柔いのを喰ふために他の木を植ゑたのではなか〳〵育たない。そんな事からその葉に毒を持つ馬醉木の木のみがいちめんに植ゑてある。この木の葉は細(こま)かな、黑い樣にも見ゆる常磐木で春早く白色の花を開く、鈴なりの小さな花である。その花も旣に散り終つて、唯だ一面に靑々と茂り渡つたこの馬醉木が原の暮春のながめよ、といふ一首である。何處となく旅情のうごいてゐるのが感ぜられはしないだらうか。

## 初夏の歌

頰をすりて雌雄の啼くなりたそがれの花の散
　りたる櫻にすずめ

極く以前に作つたものである。其處此處にうす紅の花びらなどの殘つてゐる葉櫻の枝に雀が相寄つて遊んでゐる、それを眺めて輕い微笑を覺えながら詠んだものだ。銀の器などに彫りつけたい模樣である。

風ひかり桃の花びら椎の樹の落葉とまじり庭
　に散り來る

これも同じ頃の作。桃の花のさかりの頃、さかりの過ぎゆく頃、椎の木はさかんにその古い葉を落す。水氣と光とのゆたかな空にそよ〳〵と風でも立てば、あの小さな枯葉がそれ〴〵微かな音を立てながら一齊に散つて來る。さびしい靜かなものである。



河を見にひとり來て立つ木の蔭にほのかに晝
　を鳴く蛙あり

心がさびしさを求むる時、靜けさをおもふ時、私はよく河を思ひ出す。また細やかに流れてゐる溪の姿を思ひ出す。これもまたさうした心に誘はれて下總の江戶川べりまで出かけて行つて詠んだものであつた。

下總の國に入日し榛(はり)はらのなかの古橋わが渡
　るかな

ただひとり杉菜の節をつぐことのあそびをぞ
　する河のほとりに

藪雀群る田なかの停車場にけふも出で來て
汽車を見送る

白き花散りつくしたる下總の梨の名所のあさ
き夏かな

榛原のあをくけぶれる下總に水田うつ身はさ
びしからまし

これらの歌も右の蛙の歌と同じ時同じ川邊で出來たものであつた。季の無い歌にも何處にか此季節の靜けさと惱ましさ（云ひ得べくば）とが含まれてゐる樣におもふ。この頃になると何か知らものにあまえてゐたい樣な氣持になるのが私の癖で、いゝ年をした今日でもなほ斯うした歌の作りたい氣が失せずにゐる。これらを詠んだのは廿四五歳の頃であつた。

眼のまへを大いなる浪あをあをとうねりてゆ
きぬ春のゆふぐれ

少し無理な歌だが、夕暮の濱に獨り停んでゐる眼の前にあを〳〵とうねり寄る浪のすがたに驚きながらその瞬間の氣持を詠まうとしたものだ。鎌倉の由井が濱での作。



しとしとに入日やどせる青麥のあをき穗ずゑ
をゆすりても見る

野は入日茨のかげにありやなし水もながれて
我が歸るなり

みな甘い歌だ。池袋から中野附近をとぼとぼと散歩しながら詠んだもの。『茨のかげにありやなし』はあるかなきかの水の流れてゐる側をぼんやりと歩いて歸りつゝあるの意である。

初夏の曇の底に櫻咲きをりおとろへはてて君
死ににけり

病みそめて今年もあはれ櫻さきながめつつ君
の死にゆきにけり

石川啄木君の臨終にその家で詠んだものであつた。彼の逝いた家の庭は大きな八重櫻の木があつて照るとも曇るともない惱ましい空にいちめんに花をつけてゐた。

午前九時やや晴れそむる初夏の曇れる朝に眼

を瞑ぢにけり

君が娘は庭のかたへの八重櫻散りしを拾ひうつつともなし

お女郎屋のものほし臺にただひとり夏のあしたを見に上るかな

なにやらむ妹女郎をたしなむる姉の女郎に朝はさびしき

おいらんのなかばねむりて書く文にあをあをさせる朝の太陽

或る遊廓の朝酒の後の卽興である。あゝした場所の持つ一種特別の靜けさと、初夏の朝の持つそれとは相寄つて、なか／＼に人のこころを清淨にするものであることをおもひ出す。

はつ夏の街の靄なる停車場のほのつめたさを慕ひ入るかな



水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似てうごく機關車

遊廓の朝が持つ一種の靜けさ、それは停車場にもある。私はそれが好きでよく用も無いのに其處に出かけて行く事がある。これらの靜けさに浸つて居ると、身も心もの輪廓をすつかり解きほぐして極めて安らかに眼を瞑つて居らるる樣な氣持で、寧ろ山や野に出て覺ゆる靜けさより親しみ易いのを思ふ事がある。

あさなあさな午前は曇るならひとてけふもかなしく海をおもへり

明日ゆかむ海おもひ居ればゆきずりの街の少女もかなしみとなる

夏のはじめ、ともすれば空は曇りがちである。重い光をふくんだ雲が空の四方に湧いて自づと瞼の閉ぢらるゝ樣なおもひの日がつゞく。そんな時、私はそれを逃れようとてか、若しくはもつと／＼その深みに沈んで行かうとしてか、よく旅をおもふ。さうした場合、街で行きあふ何氣ない少女などを見ても心は痛み易い。次の數首もまた同じ氣持から詠まれたものである。

あらさびしやわが背のかたに少女をり微笑め
るごとし海に逃れむ

戀ひこがれし海に行くとて買ふシャボンわが
蒼き手に匂ふ朝の街

海べりの五月の雲もわが汽船の濡れしへさき
もうらさびしけれ

曇り日やきらりきらりと櫓の光りわがをちか
たを漕ぎゆく小舟

わが渡る五月の海に魚海月さびしく群れてさ
ざ波もなし

わが古汽船雲のかげりの浪をわけさびしき海
をさすよ岬へ

夏あさき岬のはなに立つ浪のなつかしいかな
わが汽船を搖る



雲晴るれば海は俄かに紺碧の浪たちわたりゆ
るるわが船

これらはいづれも右の歌に續いて出來たものであつた。行かう／＼と思つてゐた海への旅の途上の作である。幼い心のよろこび躍つてゐるさまがそれぞれの幼い歌に感ぜられてなつかしい。此等の歌の持つ感情は甚だ弱い淡いものであるが、而かも甚しく純である。年齡の關係などで、斯んな歌のやす／＼と出來る期間は一生のうち幾らもないもの、樣にも思はれてならない。謂はゞさうした時代の遺品見たやうなものである。

## その三 （大正十三年）

自歌自釋を書く樣にといふ編輯部からの手紙であつた。引用の歌をば全て今年の五月に出版した『山櫻の歌』のなかより取り、而して、三回續くる樣にとの事であるからなるべくその時その季節に合ふ樣なものを引いて來ようと思ふ。自歌自釋とは云つても單にその歌の出來た時の四邊の景象とか自分の氣持とかを書くにとどまることになるとおもふ。（十二月末）

下草の薄ほうけて光りたる枯木が原の啄木鳥

の聲

枯るる木にわく蟲けらをついばむと啄木鳥は
啼く此處の林に

立枯の木々しらじらと立つところたまたまに
して啄木鳥の飛ぶ

きつつきの聲のさびしさとび立つとはしなく
啼ける聲のさびしさ

くれなゐの胸毛を見せてうちつけに啼くきつ
つきの聲のさびしさ

白木なす枯木が原のうへにまふ鷹ひとつをり
てきつつきは啼く

ましぐらにまひくだり來てものを追ふ鷹あら
はなり枯木が原に

離(さか)り來て聞けばさびしききつつきの啼く音は
つづく枯木が原に



耳につくきつつきの聲あはれなり啼けるをと
ほくさかりきたりて

これは昨年の十月末、上州の暮坂峠の峠寄りの枯野の中で出會つた風物を詠んだものである。暮坂峠は上州の草津溫泉から澤渡(さわたり)溫泉に越ゆる途中に當り、隨分と長々しい登りの峠である。登りが急だといふではない。なだらかに相迫つた二つの山あひの廣やかな澤をはるばると登つてゆくのである。その廣やかな澤が一面の枯野となつてゐる。もと其處に大きな楢の木が茂つてゐたらしい。都會の人たちには考へも及ばぬ大きさで、三抱へ四抱へ、伐りとつたあとの幹の直徑が大抵三尺餘もある大きな楢の木である。初めはそれを一本々々と斧で伐り鋸で引いて倒してゐたらしいが、非常な勢力を要するので後にはたゞその木の根方の樹皮の所を圓く切り剝いで水分の吸收を止め、そして自然に枯るゝのを待つ事にしたらしい。そして其木の枯るゝを待つてあたり一面に落葉松の苗を植ゑ込んである。大林區署とか御料林區署とかの事業であるであらう、かなりのんきな大がかりな植林事業であるのだ。植ゑられて既に數年を經たであらう、その落葉松はまだ漸く二三尺の高さで、附近の芒よりもかぼそく見えてゐる。そして立枯にされた楢の木はなか〳〵容易に倒壞する事をせず、巨大な幹から鋼鐵の樣な頑固な枝を四方に突き出して野原の四方に立ち並んでゐるのである。然し、要するに枯れてゐる。夙つくにその皮は剝け落ちて雨風に洒された白茶けた裸木となつて立つて居る。それが

五本や十本でなく、殆んど眼の及ぶ限りに立ちひろがつてゐるので、その中に通りかゝると何とはなしに荒凉たる氣持に襲はれる。私は初め珍しく、やがて何とも云へぬ引緊つた氣持になつてその中を通つて行つた。

其處へ何やらの鳥の啼く聲が耳に入つて來た。一聲二聲と啼き、またそれに應じて遠くの方で一聲二聲と啼く。單音の、澄んだ、鋭い聲である。聞いた聲だが、何であらうと耳を傾けてゐるとやがて解つた。啄木鳥であつたのだ。聲と同じく、姿も極めて敏捷な、鋭い形をしてゐる。それが折々その枯木の白けて立ち並んだ間を飛び交はして啼いてゐるのだ。枯木といひ、この鋭い鳥の姿といひ聲といひ、如何にも似つかはしいものに思つて眺めてゐると、其處へまた異つた他の鳥の啼く聲が落ちて來た。鷹である。見れば澤の眞上の蒼澄んだ高空に、例の暢び極まつた羽根の伸しざまで、徐ろに輪をかいてまつてゐるのである。さうしながら靜かに枯木の蔭にくつついてゐる啄木鳥を狙つてゐるのである。枯木といひ枯野といひ澄み湛へた秋の日ざしといひ、この二種類の鳥を包むに實にふさはしい光景であると思つた。そして悉く昂奮して詠んだのが此等の數首の歌であるのだ。

この暮坂峠の枯野の中ではまた落栗の歌を作つた。澤の一部に偏つて流れてゐる小谷の側、またはずつと山の尾根に寄つたあたりにはこの木の若木老木がたくさんあつた。



夕日さす枯野が原のひとつ路わが急ぐ路に散れる栗の實

音さやぐ落葉が下に散りてをるこの栗の實の色のよろしさ

柴栗の柴の枯葉のなかばだに如かぬちひさき栗の味よさ

おのづから干てかち栗となりてをる野の落栗の味のよろしさ

この枯野猪も出でぬか猿もゐぬか栗うつくしう落ちたまりたり

かりそめにひとつ拾ひつ二つ三つ拾ひやめられぬ栗にしありけり

殆んど同じ場所で出來たのだけれど、前の啄木鳥の歌より調子がやゝ輕い。思ひがけぬものに出會つて子供心にかへりながら拾ひ樂しんだ心持が出てゐるものと解し度い。

とりどりに色うつくしく並びたれこのさかな
屋が籠のうちのもの

いきのよき烏賊はさしみに咲く花のさくら色
の鯛はつゆにかもせむ

噛みしむる物のあぢはひわが肝にこたへてう
ましよき日ぞけふは

日に三たびその一たびに食ふものに量(はかり)をおき
て物食ふあはれ

身體をわるくしてゐる時の、たべものゝことを詠んだものだが、それにしては何處かおちつきの乏しいのが残念だ。

ゐつたちつする束の間も靜かなれおだやかな
れとねがふこころぞ

掃く間なき此頃の部屋のちりほこりを立てじ
とわれのたちゐするなり

隙間より漏れゐて細き冬の日ざしをやごとな
きものに眺めこそをれ



沸き遲きこの湯を待てば寒き夜の夜爲事のあ
ひに頭痛(あたま)めり

極めて忙しいあひだに在つて自分の心の靜けさを保たうとしながら詠んだものである。何處か一途の心の、かぼそいせつない匂ひが匂つてゐはせぬかとおもふ。

水汲むと井戸より見れば散りしける庭の落葉
に霜の明るさ

身を強めむねがひを持ちてわが浴ぶる水のひ
びきぞ身にこたふなる

寒(かん)の水に身は氷れども浴び浴ぶるひびきにこ
たへ力湧ききたる

浴び浴ぶる水身にしみて血の色のあざやけき
おのが肌となりたれ

浴び浴びてわが立ちたれば身體よりしたたる

水の湯氣たつるなり

水はもよ豐かにしあれ浴び浴びてなほゆたゆたに餘らむがほど

銳心(とごころ)ぞおのづと出づる寒の水あびはててわがたちあがる時

これは寒中冷水浴の歌であるが、これらの歌から採るとすれば中に含まれた清新味であらう。形を略いた、出事事を別にして尙ほ何處かさうしたものが感ぜられはせぬかとおもふ。

『冬凪』といふ題で、つまりさうした心持を歌はうとして作つた數首がある。

散れる葉のいろあざやけき冬凪のあかるき庭に立てばたのしき

やがていま梅の咲かむとおもふ頃をすがれて菊の花咲きてをる

窓にさす冬の日ざしにこころ浮きて立ち出づる庭にみそさざい啼く



すがれつつなほ咲ける菊の根がたなる枯葉の蔭にみそさざい啼く

すがれ咲く菊より飛びてみそさざい梅の枯枝にあらはなりけり

門さきの麥田の土は乾きたりこの冬凪のつづく日和に

いちはやく箱根の山のすがれ野を燒ける煙見ゆけふの凪げるに

冬凪に出でてわが見る富士の嶺の高嶺の深雪(みゆき)かすみたるかも

草枯れし畦道をゆくわが娘くれなゐの帶をむすびたるかも

かうした歌はひと頃の私には最も作り易く且つ多少得意になつてゐた種類のものの樣に自分でもおもふが、今ではもう慊らぬ。そのつもりで作るのではないけれど、どうも何處か微温湯的のところがあつて食ひ足りない。

## 冬から春へ

幼くて見し故鄕の春の野の忘られかねて野火
は見るなり

野火はおほかた一月から二月にかけて見らるゝ。遠くの山に――この歌の場合では沼津から見る箱根山――この火の燃えてゐるのを見出すと、オゝもう春だナ、といつも思ふ。そしてさう思ふ心の下にはちひさい時に見て來た故鄕の野火の記憶がかすかに浮んで居るのが常である。

假橋を渡れば寒き風吹くや雪解（ゆきげ）の川の水は漲
り

橋錢をはらひて渡る假橋の板あやふくて寒き
春風

自分のいま住んでゐる近所の黒瀨橋といふのを詠んだものである。輕い卽興の作であるが、その輕い味を或る時私は樂しむ。

かすかなる羽蟲まひをり窓のさきけぶらふ春



の日ざしのなかに

畑なかの草にうごける風ありてけふ春の日の
うらうけきかも

かぎろひの昇りをる見ゆ白菜（はくさい）の摘み殘されし
庭の畑に

庭さきの屋敷畑にかぎろひの昇るをひと日見
つつさびしき

はるかなる聲にし聞ゆ庭に出でて呼びかはし
遊ぶ妻子が聲は

春のはじめの頃の憂鬱または靜寂を歌つたものである。前の假橋の歌に較べて心の調子はよほど重くなつてゐるのを覺ゆる。

窓下の霜の畑にかぎろひの立つ日を聞ゆ隣家（となり）
の機（はた）は

藁屋根の軒端をぐらき北窓に起りゐて澄めり

その筬(をさ)の音(ね)は

わが畑のさきの藁屋根いぶせきにその家の妻
　は機織りいそぐ

窓あけて見てをれば畑の眞向ひの家に織る機
　いよいよ聞ゆ

畑爲事いまを少なみ百姓の妻が織る機ひねも
　す聞ゆ

前の數首に續いて、同じ時に出來たものであるが、前のより明るく且つ調子も幾らか緊つてゐはせぬかと思ふ。

寒の雨しらじら降りて柴山のはづれにかかる
　瀧のかすけさ

冬の雨しき降る海ゆ寄る浪の高くあがらず岸
　に眞しろき

冬さびて赤みわたれる斷崖(きりぎし)の根に寄る浪はか



　すかなるかな

私は毎年正月の元日、沼津から汽船で二時間ほどかゝる伊豆西海岸の土肥溫泉といふへやつて來るのがこの五六年の習はしとなつてゐる。これらは昨年の正月、その汽船の中で詠んだものである。歌の線の細いのが現在の自分としては甚だ喰ひ足りないがその時は矢張りさうした心境であつたのだらうと記憶せらるゝ。

柴山のかこめる里にいで湯湧き梅の花咲きて
　冬を人おほし

湯の宿の靜かなるかもこの土地にめづらしき
　今朝の寒さにあひて

わが泊り三日四日つづきゐつきたるこの部屋
　に見る冬草の山

雪もよひ寒けき空にうち群れて千羽鴉(せんばがらす)わたる
　この里のうへを

わが向ふ冬草山のうへに垂りて雪をふくめる

あかつきの雲

柴山の尾根より出づる冬の日はひたとさしたりわが坐る部屋に

これらはその土肥溫泉に着いてから滯在の間に詠んだものだが、途中で作つたものよりよほどよく坐つてゐる樣だ。

道ばたの古寺の門（かど）のたかむらの蔭に見出でし梅のはつ花

青竹のしみ立つかげにほそほそと枝を垂りつつ咲けるこの梅

ひややけき日蔭に咲ける白梅のしみみに咲きて花のちひささ

篁の小ぐらきかげに浮き出でて咲く梅の花は雪のちひささ

土肥は暖い土地で、正月の十日にもなればもう梅が咲く。これはその花を初めて見出した時にあわて、作つたものである。少し浮いてゐる。どうも私は浮れる癖があつていかぬが、然しあまりに浮れぬすぎる現代の歌人の中にあつて一人位ゐの浮れ屋があつていゝかも知れぬ。



借り住まふ邸の庭にかぞふれば木（こ）がくれて咲く五本の梅

春はやく咲き出でし花の白梅の褪せゆくころぞわびしかりける

花のうちにさかり久しき白梅の咲けるすがたのあはれなるかも

老いたるは夙く散り失せつ枝長き若木の梅はあせながら咲く

ゆくさくさ仰ぎて過ぐるわが門（かど）のあせぬる梅をうとみかねたり

これは土肥から沼津へ歸つての作である。前のよりおちついてはゐる樣だが、よしあしは自分にもわからぬ。

まひのぼり空の光にかぎろひて啼き入れる雲雀聞けばかなしも（その一）

かそけくも影ぞ見えたる大空のひかりのなかに啼ける雲雀は

天つ日にひかりかぎろひこまやかに羽根ふるはせて啼く雲雀見ゆ

東風（こち）吹くや空にむらだつ白雲の今朝のしげきに雲雀啼くなり（その二）

おほどかに空にうごける白雲の曇れる蔭に雲雀啼くなり

その一、その二、は作つた場合の異つてゐるのを示す。當時はやゝ得意の作であつたがいま見れば多分の稚趣を帶びてゐる。これを拔いてもつと清澄なものにしたいものだ。然しそれもむづかしい問題であまりに凝つて來ると歌の膏（あぶら）が拔けてしまふ虞がある。拔けすぎて味もそつけもないものになることは私の最も恐れるところである。



海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり

向つ國伊豆の山邊も見えわかぬ入江の霞わけて漕ぐ舟

靜浦を散歩しながらの作、初めの一首は好きな一首である。程經て同じ海岸に出て作つた一首をも書き添へておかう。

入海の向つ國山春たけて青みわたれる伊豆の國山

時雨空小ぐらきかたにうかびたる富士の深雪（みゆき）のいろ澄めるかな

霞みあふ空のひかりに籠（こも）らひていろさびはてし富士の白雪

をちこちに野火の煙のけぶりあひてかすめる

空の富士の高山

この前後の季節に於ける富士を歌つた三首である。初めの一首は一月のころ、あとの二首は二月か三月であつたと思ふ。富士の歌はまことに作りにくい。ともすれば概念におちて富士の實際が出て來ない。然し私はこの山を愛してゐる。そのうちには一つ立派に歌ひ生かして見たいものと考へてゐる。

（一月十六日伊豆土肥溫泉にて）

## 山櫻の花

私は山櫻の花を好む。すべての花のうち、最もこれを愛する。

ついでに言つておくが、都會住居の人などにはこの山ざくらの花を知らずにゐる人があるかも知れぬ。東京などに咲くのは多く吉野とか染井とかいふ種類ださうで本統の山ざくらをば殆んど見受けない。この櫻は花よりも葉の方が先に萠える。その葉の色は極めて潤澤な茜を含んで居る。そしてその葉のほぐれやうとするころにほんの一夜か一日で咲き開く花の色は近寄つて見れば先づ殆んど純白だが、少し遠のいて眺めるとその純白の中に何とも言へぬ淸らかな淡紅色を含んで居る。花のさかりは極めて短く、ほんの二日か三日かで褪することなくして散つてしまふ。散り初めたとなればそれこそ一寸の間をもおかないではらはら〳〵と次ぎから次ぎに散り次いで程なく若葉のしめやかな木となつ



てしまふのである。その山櫻の木の多いところはこの附近では先づ伊豆の湯ヶ島である。天城山の北麓に當る峽谷で、溫泉がある。私はこの二三年來、その花の咲くころとなれば每年缺かさずに其處へ出かけてゆく。次ぎに引く數首の歌は一昨年の春、其處に遊んで作つたものである。

うす紅（べに）に葉はいちはやく萠え出でて咲かむとすなり山ざくら花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花

かきすわる道ばたの芝は枯れたれや坐りてあふぐ山ざくら花

瀨々走る山魚（やまめ）石斑魚（うぐひ）のうろくづの美しき春の山ざくら花

つめたきは山ざくらの性（さが）にあるやらむながめつめたき山ざくら花